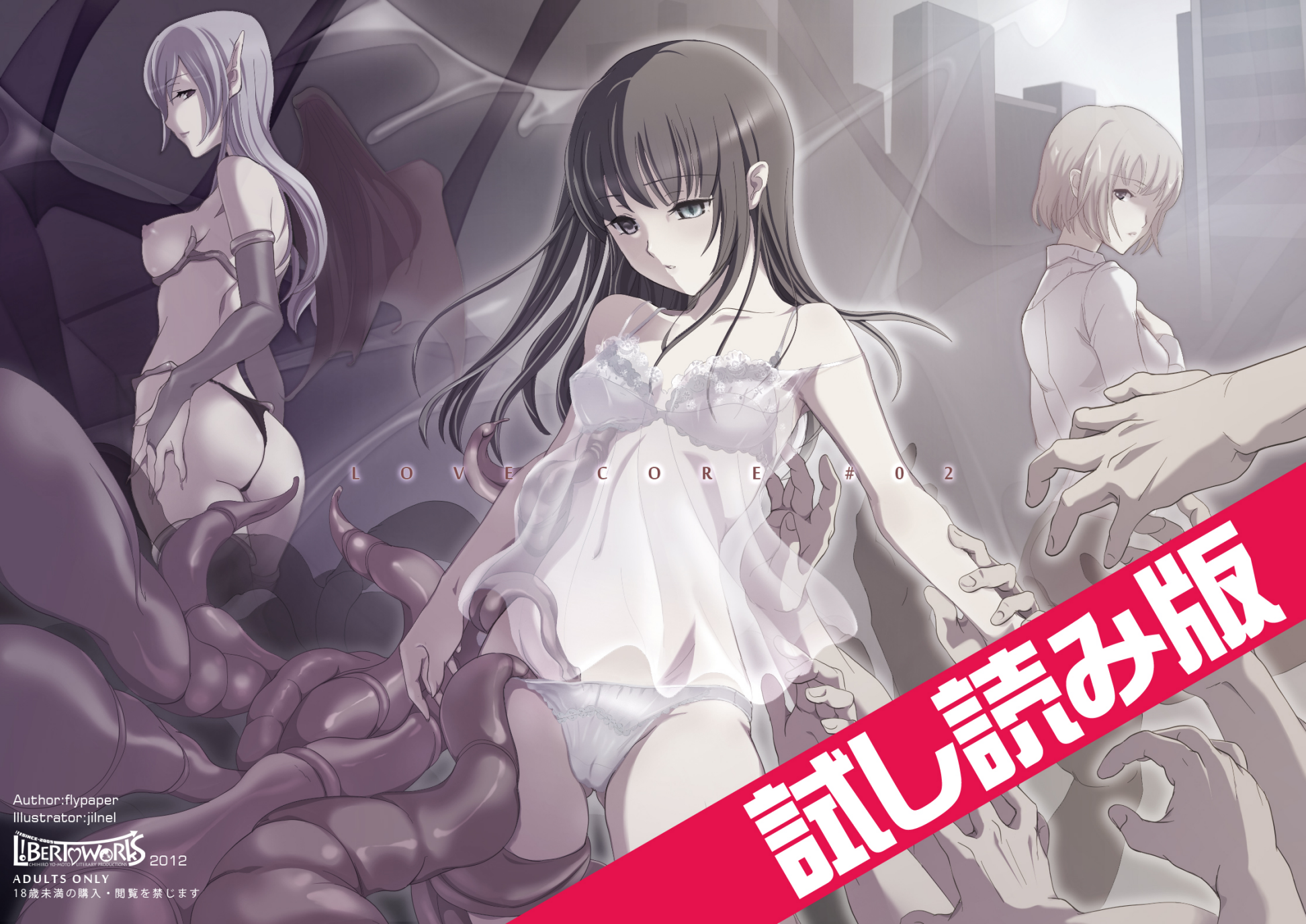
LOVE CORE #02
試し読み版
Author:flypaper
Illustrator:jilnel
LIBERTOWORKS
2012
ADULTS ONLY
18歳未満の購入・閲覧を禁じます

L O V E　C O R E　# 0 2

act 5 : Dreamlike Reality ---------- 03
act 6 : Living Alone ---------- 22
act 7 : Serious Mistake ---------- **
act 8 : Instinctive Feeling ---------- **
act 9 : Even Soul Became Female ---------- **
act 10: Fall into Bottomless Pit ---------- **
act 11: Become a Slave to Passion ---------- **
act 12 : My Happy End ---------- **
Epilogue ---------- **
Publication Data ---------- **

※試し読み版では、act5とact6のみ収録されております※

author:flypaper
illustration:jilnel

LIBERTYWORKS 2012

5：Dreamlike Reality

それはきっと、長い長い夢だったんだ。
夢見ていることすら、忘れるほどの――。

○

その日のデートの終着点は、住み慣れた俺の部屋（マンション）だった。
「ほんと、女はいいなぁ、何度でもイケてさ」
ベッドの上で胡座（あぐら）をかいた俺は、傍らに寝そべる彼女の白くて丸い尻に手を伸ばす。
彼女に少しでも元気が残っていればすぐに俺の手を叩いてきて、怒っているのか嬉しいのか判然としない声音で「くすぐったいからやめて」などと言うはずなんだが、今はただ為すがまま。微かに呻き声を上げるのが精一杯。
まあ、それも当然か。ついさっきまで愉悦の涙を流しながら髪を振り乱し、俺が腰をほんの数センチ揺さぶるだけで獣のような叫び声を上げ、全身をがくがくと痙攣させていたんだから。途中で危うく気絶しかけて放心していた時もあった。もう精魂尽き果てて、指一本動かすことすら億劫なんだろう、
「女のエクスタシーは男の数十倍から百倍の衝撃があって、しかもそれが繰り返し何度も起きて、延々と持続する時もある……か」
その豆知識（トリビア）を最初に知ったのはいつだったか。もう憶えていないけれど、割と最近まで眉唾だと思っていた。事実よりもかなり誇張されているんだろうな、と。
けれど、彼女と出会って愛し合うようになってからは――肌身が合うとか、身体の相性がいいとか、そういう相手と巡り会った女の姿を知ってからは、微塵も疑っていない。
「女って、いいよな。……羨ましいよ、本当に」
汗に濡れた尻の肌に、軽く爪を立てる。
彼女が気怠げに首を巡らせて、俺の顔を覗き込んできた。
「ふま、ん、なの……？」
存外に真面目な声と顔。
「わたし、じゃ……まん、ぞく……できない……？」
「いや、そういうことじゃない。お前に不満なんかないよ」
即答。それは俺の本心。
俺たちはこうして定期的に逢って肌を重ねる間柄だけれど、将来結婚しようだの、ずっと一緒に居ようだの、そういう話が出たことは一度もない。身体だけの関係と言い切れるほどドライでもないのだけれど、互いの関係性に不可侵の境界線を引いている。
愛し合うのに邪魔だから。

仕事や財産、社会的な地位、親兄弟や親戚などの血縁関係、将来設計。そうしたものが絡んだとたんに、男と女の関係はやたらと面倒臭くなる。ただ単に好きだからとか、気心が通っていて肌身が合うからとか、そういうプリミティブな理由は二の次になっていく。

悟りとか達観なんて言葉を使うと大袈裟だけれど、俺も彼女もそこそこ歳を重ねて、それなりに恋の始まりと終わりを繰り返してきたから。お互いに一番居心地がいいように、無我夢中で抱き合えるように、そうやって試行錯誤を続けるうち、気がついたら余計なものをベッドの上へ持ちこまないのが暗黙の了解になっていったんだ。

だから、愛し合う時は互いに遠慮も容赦もない。獣のように本能のまま貪り合うこともあれば、理知的に相手を追い詰める時もある。上になったり下になったり、責めたり責められたり。二人で一緒に楽しめそうだとわかれば禁忌に触れそうなこともやってきた。何もかもさらけ出して互いの性を楽しんできた。

これで満足しない男なんて、いるはずがない。

「でもさ、それでも……。俺なんて……男なんて」

若干の嫉妬が、声に滲みそうになる。

「結局、ウッ、て呻いて、たった数秒で終わりなんだぜ。何をどんなに工夫しても、死ぬとか逝くとか気絶しそうになるとか、腰が抜けて次の日になっても歩くのすら大変だとか、そんなの絶対ありゃしない。だから……」

俺は、尻の上に置いていた手を、そっと滑らせる。

指先が、彼女の秘部に触れる。

ついさっきまで二人が愛し合っていた証。指先に粘液が絡みつく。くちゃりと重い水音が立つ。蕩けたままの肉襞がよじれ、奥に隠していた淫らな膣口が露わになる。イき続けて疲れ果てたそこは、荒い息を継ぐようにわずかな収縮を繰り返している。

「普段、お前は……女は、どんな風に感じてるのかなって、知りたくなる」

結局のところ俺は男で、陽根でしか快楽を感じられないから。

俺には備わっていない女陰に、俺とは違う女の快楽に、どうしようもなく憧れる。

「……そう。そうなんだ」

――くすくす、くすくす。

彼女が急に笑い出した。妖しく、淫らに。

こいつのこんな笑い方、今まで見たことがなかったから、俺は思わず眉を顰める。

「そんなに、知りたい……？」

俺の股間に向けて、彼女が手を伸ばしてくる。白くて細くて柔らかな彼女の指に陽根を絡め取られ、ゆるゆると優しく揉まれ、撫で回される。行為の直後でべっとりと愛液が付着したままだから、にちにち、くちゅ、と粘性の音まで立つ。

けれど、陽根は萎れたまま。白濁した男の精をさんざん吐き出した後だから、もう一滴も残っちゃいない。勃つはずがない。

「お望み通り、教えてあげる。女の、感じ方」

彼女の指が、俺の陰部を這い降りていく。

陽根から陰嚢、鼠径部を通って、腰の底、蟻の戸渡りへ。

「ここに、ね。……女の子は、えっちな穴が、あって」

菊座のすぐ側、蟻の戸渡りの終点近くを、彼女の指がくいくいと圧す。

「どろどろに溶けて湿った膣内(なか)を押し広げて、男の人のモノが入ってくるの。手で握るより、口に入れて頬張るより、ずっとずっと大きく感じる……杭でも打ち込まれたみたい。経験が浅い頃は、それが痛みや違和感になった。怖いもの。自分の身体の中にそんな大きな異物が入ってきて、お腹の中を蹂躙するのだから」

「女も楽じゃない、か」

「でも、それも、慣れるまでの話」

くすっ、と、悪戯っぽく笑う。

「慣れてしまえば……セックスなんて別に特別なことじゃないって、そう納得してしまえば、痛みも違和感も恐怖も感じなくなる。変わりに感じるのは、まず安堵感……。自分の中の決定的に欠けた部分を埋めて、確かな芯を通してくれた……そういうホッとする感じ。抱き合うだけでも満足するような……」

「そこまで来たら、男と一緒だな」

俺は素直に、頷く。

「男の方も、ホッとするもんな。痛いくらい硬くなって、気が急いて、辛くてさ。でも、自分のモノを温かく柔らかく包まれると、ほっとする。最初はしばらく動かずに、静かに感触を味わっていたい気分になる」

「でもね、それがすぐに、焦れるような……居ても立ってもいられないような、もどかしさに変わっていくの。入ってきたモノの形を膣内(なか)が憶えて、馴染んで……安堵感が快楽に化けていく。それは、何もしなくてもどんどん、どんどん蓄積されて、もっと欲しい、って思い始めるの。いっぱい動いてくれたらもっと気持ちいいのに、って。……ねえ、どうしてそんな風になるんだと思う……？」

「？　さあ、どうして？」

彼女が、ゆらりと身体を起こす。

そして、俺の唇に、自分の唇を重ねてくる。

最初はただ、閉じた唇を重ねていただけ。

でもすぐに、唇がほどけて、舌が絡み合う。

「……これと、同じ」

唇の間にかかった唾液の橋を切りながら、彼女が言う。

「ずっと唇を重ねてたら、舌、絡ませたくなるじゃない。誰だって」

彼女の唇が、俺の股間へと降りていく。

俺の陽根に、先端の鈴口に、舐めるようなキスをする。

「女の子宮も、一緒なの。……触れ合ってるだけじゃ、満足できないの」

ちょん、ちょんちょん。彼女が陽根の先端にキスを繰り返す。動いて、突いて。めちゃくちゃにして。はやく、はやく。子宮口に見立てた唇が陽根(ペニス)にせがむ。

「一番欲しいところ、一番気持ちいいところ、指なんかじゃ絶対届かない、大きくて太くて熱い陽根(コレ)じゃないと、ダメなの。少し動かれるだけで、コツンコツン突き上げられるだけで、子宮の形がぐねぐね変わるの。女の一番大事なところを好き勝手に捏ね回されるの。全身に衝撃が駆け抜けて、頭の中が引っ掻き回されるみたいに感じ続けて……苦しくて、辛くて、身体がバラバラになりそうで、気が狂いそうで……でもね」

彼女の手が、俺の下腹に添えられる。

それは、俺が女だとしたら、子宮があるべき場所だ。
「そうやって、滅茶苦茶にされるのが、信じられないくらい、気持ちいいの……」
下腹のすぐ側にある彼女の目が、俺を見上げてくる。
その側にある俺の陽根（ペニス）は、いつの間にやらガチガチに勃起していた。先走りを涎のように垂らしながら天を突くように反り返っている。
彼女の感じ方を――女の悦楽を想像するだけで、そんなに興奮してたんだろうか。
「……もう一回くらい、できそうだな」
俺は彼女の肩に手をかけ、やんわりと押し倒す。
「続きは、お前の子宮（からだ）に、直接聞くよ」
言いつつ、俺は彼女の両脚を開かせ、その間に自分の腰を割り入れる。
けれどその途中で、彼女が太腿に力を入れてきた。この流れで拒まれると思ってなかった俺は、少なからず面食らった。
「そんなことしても、意味ないでしょ？」
俺の腰を捕まえて、秘部が触れ合うことを拒絶した姿勢で、彼女が身体を起こしていく。
彼女の上体が迫ってくると、俺の身体は逆に後ろへと傾（かし）いでいく。
「男の身体である限り、男のようにしか感じられないもの。女がどんな風に感じてるかなんて、永遠に知ることはないんだから」
「いや、そりゃそうだろうけど……」
彼女が俺の胸板に手をかけて、軽く押す。押し倒す。
抗うこともできたけれど、強いてそうする理由もない。どすん、とベッドの上へ倒れ込んだ俺の上へ、彼女の身体が覆い被さってくる。
「なっちゃいましょうよ。……女の子に」
胸板にあった彼女の手が、乳首を軽く撫でて脇腹を通り、腰へ向かう。
屹立した陽根（ペニス）へ向かっているのかと思ったけれど、その横を通り過ぎてしまった。
「あなたのこれ、取ってしまえばいいの。……簡単よ」
彼女の掌が、俺の股間にある袋状の器官――陰嚢を、そっと包み込む。
「全ての生命の基本は女（メス）であって、男（オス）はそこから派生した変異体に過ぎない。その変異を引き起こすのが精巣。つまり、陰嚢（コレ）はあなたが生まれる前から、あなたの身体をずっと支配しているの。身体を男に作り替えるために、男の毒を絶え間なく身体中にばらまいてきた。それさえなければ……男の毒を身体の中から残らず排除して、影響をリセットしてしまえば……」
「あれ……？　その話、聞いたな。どこかで」
陰嚢を撫で回していた彼女の手首を掴み、引き離す。
「どこだっけ、ずっと昔に……おかしいな、思い出せない。あれ、確か……ん、むっ」
懸命に思い出していたのに、キスで邪魔された。
彼女の両手が俺の頭を押さえ込み、舌が口腔に潜り込んで好き勝手にのたうちながら、甘い唾をとろとろと喉の奥へ直接流し込んでくる。その量があまりに多くて少し噎（むせ）ぶが、彼女は俺が苦しんでいることなどお構いなし。飢えた肉食獣が獲物の喉笛に噛みつくような、激しくて乱暴で容赦のない、情熱的なキスだった。
戸惑いながらも、俺はそれを受け止める。

触れ合った唇の柔らかさ。絡み合う舌と粘膜。流れ込む彼女の唾液。息苦しいのにそれらを拒もうとしないのは、どうしようもない男の性。混ざり合う体液の向こう側に、求めてやまない女の匂いを感じ取る。鼻腔にねっとりと絡みつくような独特の甘い香り。

俺は力の限り、彼女の華奢な身体を抱き返す。彼女の顔が、肌が、髪が、何もかもが愛おしい。いっそこのまま、彼女と溶け合ってしまいたい。彼女の全身から立ち上る女の匂いにどっぷりと浸ってしまいたい。そうしたら、どんなに気持ちいいか――。

「そんなに、美味しいですか？　私のキスは」

――驚いて、目を見開く。

激しいキスの合間、息継ぎのためにわずかに離れた唇と唇。俺の眼前にあるのは見慣れた彼女の顔ではなく、獲物を前に舌なめずりする蛇のような冷たい瞳。あまりに目鼻立ちが整いすぎていて、本当に人間なのかと疑うほどの美女だった。

誰だ、こいつは？　彼女はどこに行った？　何がどうなってる？

驚き、戸惑い、狼狽える俺の口元に、美女の掌が覆い被さる。

「……さ、飲んで下さい」

一瞬、何のことだかわからなかったが、少し考えてすぐに気付く。

掌で塞がれた口の中には、彼女との――いや、この女とのキスで口腔に流れ込んできた甘い香りが溜まっている。これまで延々と流し込まれた大量の唾。

つまりこいつは、それを飲み下せと言うのか。

「唾ではありませんよ。女の毒です。」

美女が、微笑む。

「男の毒を身体から追い出して、その影響を打ち消し、女の身体へと作り替えてしまう劇薬。その原材料は、女に生まれた幸せを知らずに死んでいった若い娘たちの情念。千や万を軽く越える魂が凝り固まって物質化した愛の精髄から抽出したもの……」

何だ、こいつ。何を言ってるんだ？

「私は魔女。人間ではありません。いろいろ魔法が使えるんですよ。だから、女になりたいというあなたの望み、叶えてあげます。……さ、飲んで」

涼しげな微笑みを浮かべて、魔女を自称する女が繰り返し促す。

ふざけてるのか、こいつは。

魔女だの何だのというヨタ話もそうだが、いきなり彼女とすり替わって、俺の口の中へ唾液混じりに毒とやらを流し込んだという。これで言われた通りに飲み下す奴などいるものか。胸の底から怒りが湧いてくる。

俺は魔女を名乗る女を突き飛ばし、口の中に溜まった毒を吐き出そうとして。

――ごくり。

喉が鳴り、毒を飲み下す。

魔女を突き飛ばそうとした手も、宙を彷徨いながら白く細い肩の上へ落着する。結果だけ見れば、俺が魔女に感謝の抱擁をしたみたいだった。

「……な、んで」
意味がわからない。どうして俺は考えていたことと真逆の行動を取った？
「あなたは、もう、知っているからですよ」
愕然とし、青ざめた顔で狼狽える俺の頬を、魔女が優しく撫でる。
「女になれば、どれほど気持ちよくなれるか……。男として生きる価値など微塵もない。女の身体で得られる快楽に比べれば、男の身体で得られる快楽なんて無価値だと。それを身をもって知っているから……」
魔女の顔が、ゆっくり、ゆっくり、近付いてくる。
「あなたは、今、夢を見ているんです。捨て去ったはずの、過去の夢」
柔らかで、形のいい唇が、蠱惑的に動く。
綺麗な声を発しながら、近付いてくる。
「さあ、目を覚まして。思い出して。……本当のあなたを」
魔女と、俺の。
唇が。
重なる。

――――――どくん。

急に心臓が大きく跳ねた。俺の身体に衝撃が走る。
最初は、魔女に口を塞がれて苦しいだけかと思った。
けれど、違う。絶対に違う。
身体が毒に冒されてるんだ。女の毒が効き始めたんだ。

どくん、どくん、どくん。
どくん、どくん、どくん。

心臓が暴れ出す。激しい動悸が続く。全身から元気が吸われていくような、魂を奪い取られるような、そんな錯覚に陥る。これまで全身に広がっていた男の毒――俺の心と身体を男にしていた要素。それが剥離し、経絡や血流に乗って股間へ逆流していく。
続いて、自分の意思と関係なく、腰回りや下腹の筋肉が強烈に収縮し始めた。そこに第二の心臓が出来たのかと思うほど、何度も何度も収縮を繰り返す。
集められた男の毒は、激しく脈動する下腹で凝縮され、白濁した精へと作り替えられる。そして、すぐ近くにある陽根（ペニス）へ向けて凄まじい勢いで送り出されていく。
「う、あ……ああっ、うあああっ……」
腰骨から全身を這い上がってきた感覚が呻（うめ）きになって、口から溢れる。陽根（ペニス）がパンパンに張り詰め、幾筋もの血管を浮き立たせ、充血して赤黒く変色し、びくびくと痙攣しながら信じられない大きさにまで膨れあがる。破裂しそうなほどの痛みと一緒くたになって、何とも言えない独特の切迫感が腰の奥に生まれる。
もう我慢できない。イきたい。射精（だ）したい。今すぐに。一刻も早く。
溜まった白濁を絞り出さなければ、陽根（ペニス）が破裂してしまう――!!

そんな強迫観念に駆られた俺は、首を左右に振って魔女のキスから逃れ、鉄のように硬く火傷しそうなほど熱い陽根を握りしめた。それだけで全身に快楽が広がる。射精の予感がこみあげてくる。

「で、射精るっ、射精る射精る射精るっ……!!」

全身を硬直させて、身構える。

きつく閉じた瞼の裏で、火花が散る。

意識が飽和して白く塗りつぶされて――。

「……え？　あ、あれ……ッ、うあ、っ……」

何も、出ない。

イった感じは確かにある。腰の奥でキュウッと収縮し、何とも言えない心地よさが局部に広がって。間違いなく気持ち良かった。今もそれが続いている。何度も何度も繰り返し。けれど、それだけだ。

肝心の白濁は、一滴たりとも出てこない。

「……なぜ、でしょうね？」

魔女が、戸惑う俺の顔を見て、くすくすと笑う。

「いっぱい、いっぱい、噴水のように、全身がどろどろになるまで射精るはずなんですけどね。男の毒を一滴残らず吐き出して、精巣が干からびてしまうまで、一生分の射精を繰り返すはずなのに、何も出ませんね。……さあ、どうしてでしょうか」

魔女が、陽根を握っていた俺の手を取る。竿の部分から指を解いていく。

その様子を呆然と見ていて、ふと気付いた。

俺の手が、おかしい。女みたいに細い。

見間違いや錯覚の類かと思って慌てて目を瞬かせたが、間違いない。自分の手が、魔女の華奢な手と見分けがつかないくらいに細くて白くなっている。二の腕もすっかり痩せて、血管も浮き出ておらず、体毛も薄い。

「な、なんで……どうして、こんな……」

呆然と呟いたその声も、女のように甲高い。

慌てて全身を見る。手どころか足も細い。背も間違いなく縮んでいる。骨盤が拡大して砂時計みたいに腰がくびれてしまっていた。ひょっとして顔も――うわ、案の定だ。目元や鼻筋の彫りは浅く、頬骨や顎の凹凸も乏しい。手で触っただけで顔全体が一回り小さくなってるのがはっきりわかる。

「急激な新陳代謝で、ずいぶん若返って見えますよ。とっても可愛い」

「じょ、冗談じゃ……!!　止めてくれ、元に戻して……」

「嫌ですよ、勿体ない。儚げで優しそうな、とても素敵な顔になっているのに。……さ、そろそろ、第二の心臓みたいだった下腹の脈動も治まりましたか？」

「？　あ、そ、そう言えば……」

「下腹の臓器がすっかり作り替わって、定着した証拠ですよ。そう、何もなかった場所に、子宮を中心とした母胎が作り出されて」

「子宮……って、ボクに？　そんな……あ痛ッ」

魔女の手がたまたまボクの胸元に触れた途端、刺すような痛みが走る。

普段なら何でもない程度の刺激。本当にただ触っただけ。なぜ痛いと感じたんだ？

慌ててまさぐってみると、皮膚の下、乳首の内側に不自然なしこりが生まれている。
これって、どこかで――。
ああ、そうだ、思い出した。思春期の頃。第二次性徴が始まって、体内のホルモンバランスが激変して、乳首の奥にしこりが出来て、軽く触れるだけでもじんじんした。あの痛みとそっくり。
ただ、かつての経験とは違う点が一つ。このしこりは、ボクの胸骨と胸元の皮膚の間で、みるみる膨れあがっていくんだ。
「ボクの……胸、おっぱい……出来てる……」
胸元へ視線を下ろすと、乳房としか表現できないものが左右に二つ。やがて痛みやしこりは薄れていったのだけれど、その頃には自分の掌じゃ隠しきれない大きさになっていた。軽く指先で突くとふにゃっと柔らかく凹み、指を押し返す何とも言えない心地いい弾力を示しながら、ふるふると官能的に揺れてみせる。
「何で、こんな……。自然に、勝手に……あっという間に……」
驚きも恐怖も通り越して、ただ呆然。
さっき女の毒を飲み下してから、一分と経っていないのに。
「まだ察しがつきませんか？」
魔女がボクの頭を撫でる。全身が新陳代謝していくにつれて髪の毛も伸び、太くて硬くてゴワゴワしていた髪質が、細くて艶やかでサラサラしたものに変わりつつあった。
「あなたには最初から、吐き出すべき男の毒がないんですよ」
魔女の手が、ボクの下半身へと滑り降りていく。
勃起した陽根（ペニス）に触る気かと思ったけれど、そこには綺麗さっぱり何もない。いつの間に萎えたんだ――いや違う、消え失せてる？　陽根（ペニス）がない！　跡形もない！
「ご自分でも気付かないほど、すんなり退縮したんですね」
クスクスクス。魔女が楽しげに笑いながらボクの股間を撫でる。
「大丈夫、消えた訳ではないですよ。ほら、ほんの少し大きめの陰核（クリトリス）。あなたの陽根（ペニス）と同じもの。気持ちよくなる神経も同じ数がちゃんと残ってます。そして……」
指先が、ボクの股間にこびりついていた何かを擦り落とす。
何だろう。垢や痂（かさぶた）の塊みたいだけれど。
「枯れ果てた精巣です。どうせ最初から中身は空っぽですけど」
とんでもないことを素っ気なく言い放ち、綺麗になった蟻の戸渡りに軽く爪を立てる。
「いた……っ！」
軽い痛みに身体がビクッと跳ねるも、魔女はお構いなし。蟻の戸渡りに立てた爪を肛門の近くから恥骨の方へ、引っ掻くように擦り上げていく。
「あ……？　え、あっ……う、嘘、何でっ……」
まるで、閉じていたジッパーを開けるように。閉じていた花の蕾が開くように。
蟻の戸渡りが左右に解（ほど）けて、中身を晒す。
それは、赤くて、薄くて、柔らかな襞が幾重にも絡み合った、母胎（ないぞう）へと続く膣口（いりぐち）。
「自分でも、見てみますか？　女の子の証（あかし）。可愛いおまんこ」
魔女が笑いかけてくる。わざと卑猥な言葉で、嘲るように。
「じょ、冗談じゃ……!!　私は、お……」

男です――。そう言おうとしたのに、何故か途中で声を呑み込んでしまう。
胸の中に、は何とも言い難い違和感。自分を偽り、無理をして嘘をつく、そういう居心地の悪さ。
自分は男だと主張しようとしただけなのに、何でこんなに気持ち悪いんだ？
「人間は誰しも、男性的な側面と女性的な側面を両方、心の中に持っているものです」
「……？」
「男性の心の陰には女性が、女性の心の陰には男性が。例外はありません、必ず存在しています。まれに陰が前面に出すぎる人もいますが、ほとんどの場合、男性は男性的な側面を、女性は女性的な側面を、本当の自分だと信じて疑わない」
「な、にを……言って……？　私は……あ、あれ、私？　違う、ボク……俺……」
「ほら、ご自分でもわかるでしょう？　鈴が鳴るように綺麗な今の声で、俺、なんて言ってもまるで似合いませんよね。格好悪い。みっともない。男の真似事にしかならない」
「……」
「あなたの人格は、あなたの身体がもたらす感覚や感性と不可分です。女の身体を持てば、女らしくあろうとする意識が働くのは自然なこと。無理をして男の真似をしても、いいことは一つもありませんよ。自分を偽らず、正直に、あなたらしく振る舞って下さい」
魔女が言いつつ、私の眼前で手首を捻る。
何も持っていなかったはずなのに、まるで手品のように、その手の指の間に二つの珠が突然現れた。大きさはだいたいピンポン球くらい。色は――何色とも言い難いけれど、宝石のような美しい光沢を放っている。
何だろう、あれ。何なんだろう。
――ううん、違う。
それが何なのか、私は知っている。知っていて当たり前。
だって、あれは。
「私の、身体の、一部……」
「そうですよ、まーや。その通り」
言いつつ、魔女はその二つの宝石を――愛の精髄（ラブ・コア）を、私の下腹の上で無造作に手放す。
二つのコアは私の下腹の皮膚に触れると、水面へ沈んでいくように、ごくごく自然に、私の胎内へと入り込んでいった。
落ち着く先は、子宮の両脇。本来なら卵巣のある場所に留まって卵巣そのものの機能を果たし始める。女としての身体を維持するため、全身へ女の毒を供給し続ける。
「まーやは、ね。この瞬間に生まれたんです」
魔女が、囁く。
「だから、まーやが女ではなかった頃なんて、一時も存在しません。まーやは最初から女の子。生まれた時から、ずーっと、ずーっと、女の子なんですよ……」

○

眠りの中へ沈んでいた私の意識が、少しずつ浮かび上がってくる。
重い瞼を、ゆっくりと開いていく。
まず目に映ったのは、肌理の整った、白い肌。
それが柔らかな乳房だと気付くまで、少し時間が必要だった。
「……お目覚めですか？　まーや」
頭の上から、乳房の主の声がする。
「紗英……さん」
声のした方に寝ぼけ眼を向けながら、その女の——魔女の名を呼ぶ。
「私、ずっと、寝て……そっか、そう……なんだ……」
気怠い声でもごもごと呟きながら、私はそれでも、紗英さんの胸の谷間に顔を埋めたまま。そこから離れる気になれない。
これがもし男の人だったら、良くも悪くもじっとしていられないと思う。紗英さんみたいな美人にしがみついていたら、恥ずかしさなり劣情なりを抱いてしまうだろうから。
でも、今の私の胸の中にあるのは、柔らかくて気持ちいい、温かくてほっとする、という優しい気分だけ。まるで母親にあやされてる赤ん坊みたいに。

母親——うん、言い得て妙。
今の私は紗英さんのおかげで生まれたようなものだし。
ぎゅっ。紗英さんの身体に回した腕に少しだけ力を込める。モデルさんみたいに綺麗で均整の取れた紗英さんの身体にしがみつき、いい匂いのするふかふかした温かい胸の谷間へさらに顔を埋める。唇でマシュマロを甘噛みするようにキスしたりして。

さすがに、甘えすぎかな。
でも、いいよね。だって、お母さんだし。
「母親というより、恋人つもりなのですけれど」
紗英さんの苦笑。私を抱き返して頭を撫でてくれた。この女はいろいろと魔法が使えるので、私の心の中くらい容易く読みとってしまう。嘘もつけないし隠し事もできない。
魔女。紗英さん。彼女は人間ではない。この世界で生まれた訳でもない。長い長い時間を生きてきた彼女はいろいろ不思議な能力を持っていて、私から見たら神様みたいに万能なのだけれど、でもそれ故に、大抵のことに飽きてしまっている。唯一興味があるのは、理屈抜きで自分以外の誰かに興味や執着を持つこと——つまり、恋、だけ。
今は、その恋の相手が、私。
ずっと昔、私がまだ小さかった頃。私と偶然出会って、魂の波長というか心のありようというか、そういうものに惹かれたそうだ。ほとんど一目惚れに近かった、と。
思い返してみれば、小さい頃に私が初めてキスをした相手は紗英さんだし、性の快楽を初めて教えてくれたのも紗英さんだった。身体の相性が抜群に良かったあの彼女も、私の幸せを願った紗英さんがこっそり出会いを取り持ってくれたらしい。
「私は、まーやの人生に関わりすぎたのかもしれませんね」
紗英さんが苦笑する。
「いいえ、違いますね。まーやの人生というよりは……」
紗英さんは少し躊躇いながら、続く言葉を打ち切った。
でも、わかる。紗英さんの心を読む力なんて私にはないけれど、察しはつく。
そもそも私が紗英さんと出会ったのは、私が女になる以前のことだから。その頃の出来事を「まーやの人生」と表現をするのはちょっと変だと感じたんだろう。正しくは「〇〇の人生」と男の名前を冠するべきで——。
「……あれ……？」
私は思わず、目を瞬かせる。
私の名前。男だった頃の名前。
まーやという名前を紗英さんにもらう以前は、何て呼ばれてたっけ？
しばらく考えて何とか思い出したけど、曲がりなりにも自分の名前なのに。忘れようとしても忘れられるようなものじゃないはずなのに。どうして。
「私は何もしてませんよ」
訪ねる前に答えが返ってきた。私が女として生きていくのに不都合だから記憶を閉じたとか、そういうのかと思ったのだけれど。
「人の無意識は驚くほど正直なものです。まーや自身が忘れたいのでは？」
「え……私が？」
「まーやはもう、完全に女の子なんですから。髪の毛一本、血の一滴に至るまで。だから、そうじゃなかった頃の記憶なんて、もう要らないと思っているのでは？」
「……」
「長い長い夢だったんですよ。夢見ていることすら忘れるほどの、長い夢。……でも、どんなに長い夢も、覚めてしまえば消え失せてしまう。いつの間にやら思い出せなくなってしまう。それが自然です」

紗英さんの言葉が、耳の奥で反響。
あれは、夢。何もかも、夢。
私が男だったなんて、全部、夢の中の出来事。
「そう……なのかな」
いま一つ納得しきれなくて、私は首を巡らせる。さらさらと流れ落ちてくる長い髪を細い指先で無意識に掻き上げながら、現実の自分の姿を、今の身体を、改めて確かめる。
細くて華奢な手足。丸みを帯びた身体のライン。細い腰。胸には、紗英さんほど大きくはないけれど、形のいい乳房が二つちゃんとあって。淡い翳りに隠された股間には、ただ胎内へ続く朱い色の裂け目だけがある。
私は、女。
これが、現実。
夢みたいだけど、間違いなく、現実。
「それより、寒くないですか？」
問われて、私は小さく首を振る。寒いはずがない。ここは紗英さんの魔法で外界と切り離された閉鎖空間だし、もし万一寒いと感じたとしても、紗英さんの使い魔がうねうねと無数の触手を伸ばしてきて私に絡みつき、すぐに暖めてくれるだろうから。
現に今も、紗英さんと私がベッド代わりに寝ているのは触手の群れ。見た目は少しグロテスクだけどもう見慣れた。すごく賢いし気が利くし、少なくとも私は嫌いじゃない。今だって蠕動を繰り返しながら私の姿勢を少しだけずらし、紗英さんとぴったり抱き合えるようにそれとなく補助してくれていて——。
「ひゃんっ！」
嬌声。自分でもどうやって出したのかわからない変な声。お臍の下あたりを触手の一本に撫で上げられて、驚いて、くすぐったさに背筋が震えて。いっぺんに眠気が吹き飛んだ。
「な、ななな、何、もうっ……!!」
焦り半分、怒り半分。私は慌てて身体を起こし、四つん這いのように膝を立てて、自分のお臍を撫でてきた失礼な触手を鷲掴みにする。
「ひゃっ!!」
また嬌声。今度は私じゃなくて、紗英さん。
「？　何で紗英さんが……あっ」
私は、紗英さんと密着していた身体を少しずらす。鷲掴みにした触手をよく確かめる。
私のお臍を撫でたのは、触手じゃなかった。
あ、ううん、違う。触手の一種には違いないのだけれど。
その根元が、紗英さんの股間に繋がっている。
——半勃ちになった、紗英さんの陽根。
触手を利用した形だけの紛い物なのだけれど、以前の私から搾り取った男の毒を利用しているので、本物と同じように勃起もするし射精もする。多分、触手の群れが私の身体を補助しようとモゾモゾ動いた時に触れてしまって、そのせいで生理的な反応を示してしまったんだろう。もちろん紗英さん自身の神経とも繋がっているはずなので、こんな風に握りしめたら痛いに決まってる——。
「ご、ごめんなさ……っ」

慌てて手を放して謝ると、紗英さんはまた苦笑い。
「謝らなくてもいいですよ、今のあなたの握力でどうにかなるほどヤワではないので。それに、外し忘れていた私が悪いんですから」
「外し……忘れ？」
「これを作った目的は、もう果たしましたから。まーやの処女も貰いましたし、膣の良さも教えてあげられたので」
「……ぁ、っ……」
唐突に思い出した。
眠りに落ちる前まで、私が何をしていたのか。
この陽根に、秘裂を貫かれてたんだ。
愉悦の涙を流しながら、髪を振り乱し、紗英さんが腰をほんの数センチ揺さぶるだけで獣のような叫び声を上げ、全身をがくがくと痙攣させて、何度も何度もイき続けて。女の身体でなければ絶対に味わえない絶頂を何度も何度も極められて、そこから降りてこられなくなって、ずっとイきっ放しになって。
それから――それから、それから――。
――きゅん。
急に、子宮が、疼く。
その疼きで、やっと、思い出す。
膣内射精されたんだ、私。
胎内の奥に、白濁した精の雫を。女の身体には一滴も存在しない体液を。いっぱい、いっぱい、いっぱい、いっぱい、溢れるくらいに注ぎ込まれて。嬉しい、嬉しい、嬉しい、嬉しい、私の子宮がそう叫んで、悦んで――。
「では、お役御免、ということで」
紗英さんが、脈動してひくひくと動く疑似陽根に自ら手を添える。私の目には軽く引っ張っているようにしか見えないけれど、何か不思議な能力を使っているんだろう。ぷち、ぷちっと細いゴム紐を引きちぎるような音がしたと思ったら、ひと繋がりだった紗英さんの股間と陽根の表皮に裂け目が生じ始めた。
取れちゃうんだ。こんな、簡単に。
「……？　まーや、どうかしましたか？」
「え？　あ……」
言われて気がついた。
私の手が、疑似陽根を引き剥がそうとしていた紗英さんの手を掴んで、止めている。
何でだろう。何で私、止めたんだろう。
「……可哀想、ですよ」
理由を考えるより先に、口が動いて言葉を発していた。
そう、可哀想。今の私の気持ちに一番近い言葉。だから咄嗟に手が出た。
「可哀想？　私の作った疑似陽根が？　どうして？」
紗英さんが訊いてくる。
「どうして、って……言われても……」
理屈じゃないから、説明できない。自分でも、よくわからない。

「……あ」
不意に、私の股間の辺りに、生暖かいぬるっとした感触が生じた。それは鼠径部と内股を伝って、四つん這いに近い姿勢だった私の膝頭の方へ垂れ落ちてくる。
その様子は、紗英さんにも見えていた。
「あらあら。まーやの膣内(なか)に、まだ残ってたんですね」
垂れ落ちたのは、白濁した雫。私の膣内(なか)で気持ちよくなった疑似陽根(ペニス)が大量に吐き出した精液と、子宮が悦びに震えながら垂れ流した頸管粘液のミックス。私が眠ってる間もずっと、ずっと、胎内(おなか)に留まっていた淫らな体液。
ぼっ、と、火がつくように顔が赤くなったのが自分でもわかった。物凄く恥ずかしい。放っておいても触手の群れが舐め取って綺麗にしてくれるはずだけれど、私は慌てて、内股を伝い落ちた雫とその痕跡を掌で拭う。
――どうして、恥ずかしい？
愛し合った後で、その証が忘れた頃に胎内(おなか)の奥からこぼれ落ちてくる。そんなのよくあること。もちろん、自分の身で経験するのはこれが初めてだけれど。こんなの生理現象みたいなものだし、慌てて隠そうとしたって意味が無い。
理屈では、そう、わかってるのに。
私、どうして。何を慌てて――。
「古いのは吐き出したから、まだ呑める……？」
慌てている私を見て、紗英さんがくすくすと笑う。
「陽根(コレ)が勃(た)っているのは、まだ吐き出したいから……満足していないから。それで可哀想だと……？　もう一度してあげたい、私も感じたい、いっぱい子宮を突き上げて欲しい、そう思ってるのを知られてしまったから恥ずかしい……そういうことですか？」
私、呆然。
そんなこと考えてない。全然考えてない。
「だいたい、膣口(いりぐち)がちゃんと締まってないから、こぼれ出てくるのですよね。……まーやの大事なところは、物欲しそうにずっと口を開けてたんでしょうかね。まだ足りない、もっと欲しいのに、って」
「ち、っ……違いますよっ、決めつけないで下さいっ……」
これはもう、完全に言いがかりだ。だいたい自分でもよくわかってないのに。
「ねえまーや、行動する前になるべく論理的に考えるクセ、意識して身につけた方がいいですよ。女の子はただでさえ、理屈より感情が先走りしがちなんですから」
戸惑う私を見て、紗英さんが笑う。くすくすくす、くすくすくす。本当に楽しそうに。
「そのままだと、物事を深く考えずに直感だけで行動する、猫みたいな気分屋に……いえ、それも魅力的ですかね。度が過ぎなければ」
「ああもうっ、次から次に意味わかんないことばっかりっ!!」
物凄い勢いで頭に血が上って、大声で怒鳴ってしまう。
でも、それと同時に――いやいやそんなに怒らなくても――と、心の片隅で思う。
馬鹿にされたような物言いに腹が立ったのはわかるけど、それ自体は話の流れと関係ないし。だいたい、ここで怒ったら図星だって言ってるのと同じじゃないの？　だいたい私、こんな瞬間湯沸かし器みたいに怒ったこと、今まであったっけ？

「理屈を補って諭そうとする心の裏側……男性的側面（アニムス）。でも、現れ方がまだ極端ですね」
紗英さんが腕を伸ばしてくる。半ば力尽くで、戸惑っていた私の身体を抱き寄せる。
「え……あ、あの、ちょっ……」
「慣れて下さい。女の脳に……女らしい心の動きに。表も裏も含めてあなた。うまく使いこなして、自分らしく正直に振る舞えるようになりましょうね。……今だけはサービス。私があなたの本音を汲み取ってあげます」
「本音って……」
「だから、えっち、したいんでしょう？」
「だから違いますってば！」
また瞬間湯沸かし器。自分でも良くないと思うんだけど、私の話を聞こうともしてくれないのが本当に腹立たしくて。私は紗英さんから離れようと身体を起こす。意味不明で勝手なことばっかり言う人と一緒に居たくない。
でも、すぐに手足が触手に絡め取られる。紗英さんと抱き合う姿勢を強いられる。ああもう、ご主人様に忠実すぎるんだってばこのコたちはっ。放せ！　放しなさいってば！
「……ごめんなさい、まーや。怒らないで」
暴れる私をなだめるような、優しい声。
「本当は、私がしたいだけです。まーやが欲しいだけ」
真っ直ぐに、私の目を見て、頭を撫でて。
それから、やんわりと、抱き寄せられて。
「お願い、まーや。欲しいんです。……ダメですか？」
耳元を舐めるように、囁かれる。
「だ……ダメも、何も……」
正直、私の苛立ちは治まっていなかった。拒絶しても良かった。
でも、紗英さんは私より身体が一回り大きいし、お互いほとんど裸同然の格好だから、こうやって抱きしめられると、その、えっと。
さっき破棄しようとした疑似陽根（ペニス）、その先端が――私の大事なところに、触れてくる。
がちがちに硬く、熱くなって、ひくひく脈打って。入りたい、溶け合いたい、一つになりたい、って。訴えかけてきている。伝わってくる。
だいたいさっきも、蠢く触手にちょっと触れただけで勃（た）つくらいだったのに。私と最初にした時だって――処女喪失（ロストバージン）した時だって、紗英さんが我慢できなくなって半ば強引に押し倒されたのに。紗英さんの方がずっと性欲は強いくせに。そのはずなのに。
「相手が、紗英さんなら……。嫌なんて、言う訳、ないです」
私だって、素直にそう言えたのに。
紗英さんがしたいのなら、いくらでも受け入れるのに。
最初から、私が欲しい、したいって、そう言って欲しかった。
「有り難う、まーや。大好きですよ」
抱きしめられて、軽くキス。やれやれ困ったもんだ、とか、女をその気にさせるのは一苦労だ、とか。呆れ気味に言われたような気がしたんだけど、紗英さんの心を読む能力（ちから）なんて私に備わってるはずがない。単なる被害妄想だよね。多分。きっと。
「考えすぎですよ。ちょっとからかってみたかっただけです」

紗英さんの手が脇腹を撫でるように滑り降りて腰を掴み、重なり合うために適切な位置へずらしていく。私を上にしたまま繋がるつもりなんだろう。

陽根の先端が、私の膣口へ添えられる。膣前庭辺りの敏感な粘膜に、亀頭の鈴口からにじんだ先走りの雫が触れてくる。

まだそんなに濡れてないから、すぐには入ってこられない。今はまだ、大きくて硬いものが、私の柔らかい秘裂へ押しつけられているだけ。

すごく、大きい。

改めて思う。こんな太いのよく入ったな、って。

もう一度、入ってくるんだ、私の身体の中に。

また、子宮をゴツゴツ突き上げられて、泣いちゃうのかな。

そんな思いが脳裏をかすめて、前回さんざんイかされた時のことを思い出す。きゅんきゅん、きゅん。子宮が疼く。身体が熱くなって、秘裂がじんわり濡れてくる。だんだん理性が停止していく。目の前に白い靄がかかっていくような、自分の胸の奥に隠れていた本能が目を覚ましていくような、何とも言えない不思議な気分にとらわれる。

私の身体、もっともっと、濡れないかな。

あの大きいの、早く、入ってきてくれないかな。

そんな思考以前の欲求が、本能が、私の身体を自然に動かす。紗英さんの動きに合わせて自分の腰を微妙に動かして、膣口をゆるめて、少しでも入ってきやすいように——。

「そろそろ、大丈夫でしょうかね……」

紗英さんが呟いて、ぐっ、と腰を持ち上げ、力を込める。

ぬぷり、と、疑似陽根の先端がとば口を越える。とうとう入ってきた、私の膣内に。入ってきた、入ってきた、入ってきた——!!

「ひ、あ……っ、うあ、あっ……!! ああっ、やはあっ、うやああっ……!!」

ざわざわと肌が粟立ち、甘ったるい喘ぎ声が喉の奥から勝手に漏れてくる。紗英さんにたっぷり弄り回されて開発され尽くした私の膣内は、もう苦痛なんて微塵も感じない。陽根が細かく前後しながら愛液をまとわりつかせ、奥へ奥へと少しずつ進んでいく度に、私の身体に流れる快楽が圧力をどんどん増していく。

来る、来る、来る、奥に来る、来てる、来ちゃってる。

目頭が熱くなって、目が潤む。焦点が定まらず視界がぼやける。口元が緩んできて、はっ、はっ、はっ、と短い呼吸を懸命に継ぎながら、胸に溜まる熱を懸命に外へ逃がす。

やがて、どすん、とお腹の底に衝撃が走る。いちばん奥に突き当たった。きゅん、と子宮が疼く。痛みのように強烈で容赦のない快楽が、私の意識を一瞬で支配してしまう。

もう、何も考えられない。だって、入ってきたから。届いてるから。

当たってる、じんじんしてる、気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい——。

「腰、ぐりぐり押しつけて……。そんなに欲しかったですか？」

紗英さんが、私の頭を撫でながら、言う。

押しつけてる——腰。私が、自分で？

あ、ほんとだ。気付かなかった。

「じゃあ、今、すごくえっちな……嬉しそうな顔してるのも、気付いてない？」

えっちな顔？　嬉しそうな顔？　わかんない、自分じゃ、そんなの。

「いいんですよ、膣逝(なかイ)きをおぼえたばかりの女の子は、みんなそう。まーやだけがえっちな訳じゃありません。しょうがないんです。それでいいんです」
だ、よね。うん、そう、だよ、ね。
だって、これ、すごい、きもち、いい、から。
欲しがるのも、嬉しいのも、しょうがない。
「さ、まーやが飽きるまで、腰が抜けるまで、いっぱいしてあげますからね」
紗英さんが、腰を揺すり始める。
「ひあっ……?! あ、やっ! やはっ、あっ……!!」
私の恥骨と、紗英さんの恥骨は、ぴったりとくっついたまま。陽根(ペニス)は出入りせず、私の秘裂に根元まで埋まっている。ぴったり密着している。外から見たらほとんど動いてるようには見えないんじゃないかな。
でも、その状態で揺さぶられると、私の陰核(クリトリス)や秘裂全体が紗英さんの陽根(ペニス)の根元にぐりぐりと押しつけられて、くちゃくちゃ、ねちゃにちゃ、滲み出した愛液のせいで淫らな音を立て始める。ちょうどいい具合に潤滑されて凄く気持ちがいい。
そして何より、膣内(なか)が。子宮が。
「や、っ……うあ、ああっ……!! ぐりぐりするうっ……!!」
陽根(ペニス)が膣内(なか)で縦横無尽に暴れ回る。女の胎内(からだ)は柔らかいから実際以上に揺さぶられているのに、がちがちに硬い陽根(ペニス)は一ヶ所に留まって動こうとしないから。お臍(へそ)の裏側で、大きな大きな亀頭が蛇みたいにのたうち回ってるのがはっきりとわかる。
それを、痛いとか、気持ち悪いとか、そんな風に感じたこともあったのに。
「だ……め、それ、だめ……だめ、だめっ、だめっ……」
気持ちよすぎて、頭がおかしくなる。
きつく閉じた瞼の裏で、何度も何度も白い火花が飛ぶ。
追い詰められる。限界に近付く。ぞくぞく、ぞくぞく。気持ちよさが絶え間なく背筋を這い上がって脳髄を冒してくる。意識という風船の中に、快楽という生温い液体を流し込まれ続ける。膨れあがって、限界に達して、やがてぱちんと弾けてしまう。
「うあ、あ……!! や、やだ……やだ、やだやだ、やっ……!!」
意識が快楽で塗りつぶされて、限界を超えて、ぱちん、と弾けたら。
死んじゃう。逝(イ)っちゃう。
その予感に、涙が溢れ出す。
どうして泣くの? 怖いから?
違う、怖くなんかない。
ただ、嬉しいだけ。
「そうですね……。ぱちんと弾けた後、何があるのか。まーやはもう知ってますよね」
紗英さんは決して、おだやかな腰の動きを止めない。
「これが欲しくて、まーやは女の子になったのですから」
そう。
いっぱいいっぱい、イきたくて。
何度も何度も、イかされたくて。
「イっちゃう……イく……イクよぉ、っ……来る、紗英さ……っ、来ちゃうっ……!!」

男の絶頂（アクメ）とは比べものにならない、強烈すぎる女の絶頂（アクメ）。
その予感に震えながら、紗英さんの身体にしがみつく。
紗英さんも、私の身体を強く強く、抱き返してくれる。
そう、抱きしめて。お願い。イっちゃう時は、怖いから。本当に死んじゃうかと思うほど、凄いから。いっぱい、いっぱい、抱きしめて。
「さ、いっぱいイって下さいね。何もかも、まーやのためにしてるんですから……」
囁きつつ、紗英さんの腰の動きが少しだけ速くなる。
それだけで、あっさりと限界を超えた。
「――――――ッ!! ひ、ぅ……あ、ッ――――――!!」
堪えきれずに絶叫したら、声はほとんど出なかった。
胸が、喉が、舌が、全身が、硬直してしまっていた。
女の絶頂（アクメ）は、小さな死。そのくらいの衝撃。
涙が頬を伝い落ちる。
口の端から涎がにじむ。
何もできない、ただ受け止めるだけ。
一方的に、圧倒的に、私の全てが快楽に蹂躙されていく。
「でも、まだ序の口ですよね。たった一度イっただけ」
紗英さんの腰は、まだ、動き続けてる。
イってる最中も、ずっと動いてる。
きゅんきゅん、きゅんきゅん。子宮が疼く。ひっきりなしに。全身が痙攣を繰り返す。
ずっとイってる。続いてる。終わらない。まだイってる。イき続けてる。気持ちいいよ、気持ちいい、凄い、すごい、すごいよお、あたま、おかしく、なる、っ――。
「ねえ、まーや。次は、どうして欲しい……？」
紗英さんが、私の口の端に滲んだ涎を舐めつつ、訊いてくる。
そして、私の身体の奥にある、もうひとつの口。子宮口にも。密着（キス）したままの陽根（ペニス）の先端が揺れている。ちょん、ちょんちょん。私の子宮口にキスを繰り返しながら、何度も何度も訊いてくる。どうして欲しい？　どうして欲しい？　どうして欲しい？
「ねえ、まーや。どうして欲しいんですか……？」
言わなきゃ、応えなきゃ。
でも、絶頂の余韻に震える口では、上手に喋れない。
深呼吸。頑張って、私の胸。私の喉、私の舌。たった一言でいいから。
「……もっと、くだ……さ、っ……い」
一番欲しいところに。一番気持ちいいところに。指なんかじゃ絶対届かない奥の奥へ、大きくて太くて熱い陽根（ペニス）を。少し動かれるだけで、コツンコツン突き上げられるだけで、子宮の形がぐねぐね変わって、女の一番大事なところを好き勝手に捏ね回されて。全身に衝撃が駆け抜けて、頭の中が引っ掻き回されるみたいに感じ続けて。苦しくて、辛くて、身体がバラバラになりそうで、気が狂いそうになるだろうけど、でも――でも。
「も、っと……もっと、っ……」
動いて、突いて。めちゃくちゃに。はやく、はやく。もっと、もっと。
その気持ちを目に込めて、精一杯、媚びる。

すると紗英さんは、私の目を真っ直ぐ見て、意地悪な笑みを浮かべて。
「いっぱい動いて、めちゃくちゃにするだけで、いいんですか？」
私は一瞬、頷こうとした。途中まで顎を傾けた。
でも、その途中で気付いた。
めちゃくちゃにされただけじゃ、だめ。私は必死で首を振る。
「さえ、さんも……イかなきゃ、やだ……」
膣内（なか）が、蠢く。勝手に動く。
陽根（ペニス）に、ねっとり、絡みついていく。
本当だ。本能は、無意識は、すごく正直。一番欲しいもの、よくわかってる。
「いっぱい、いっぱい、いっぱい……。まーやの子宮（おなか）に、射精（だ）してください……」

○

女になってみたい、女の快楽を知りたい。
私のその願いを、紗英さんが叶えてくれた。
知りたくてたまらなかった女の快楽を、たっぷり教えてくれた。
脳が灼けるような、全身がばらばらになって何もかも吹き飛ぶような、女だけが味わえる強烈な絶頂（アクメ）。その最中（さなか）で膣内射精（なかだし）された時の、何とも言えない満足感。
こんなに凄いなんて、こんなに気持ちいいなんて。
紗英さんも私が女になったことを喜んでくれた。私の胎内（おなか）に宿って私自身の一部となった愛の精髄（ラブ・コア）も、私が女になって女として愛されることを望んでいた。
女になって、本当によかった、
私は、心底、そう思っていた。

でも、それは。
私がただ、無知だっただけ。
何も知らないから、無邪気に喜んでいられたんだ。

私は、愚かだったんだ。馬鹿だったんだ。
本当に、救いようがないほど――。

6：Living Alone

私が完全な女へ生まれ変わって、一週間ほどが経った。
寝て、起きて、食事して、紗英さんとお喋りして、本を読んだり映画を見たり、その気になったら気持ちいいことをして、疲れて眠る――延々その繰り返し。
自堕落だと言われたらその通りなんだけど、でも、それ以外にすることがないのでしょうがない。私が男だった頃に持っていたあらゆるモノは、女に生まれ変わったせいで全く意味をなさなくなってしまったので。仕事、戸籍、学歴、資格、その他何もかも。
中でも預貯金は少なからずショックだった。ＩＣ型クレジットカードを使うためには指紋や静脈のパターンを使った生体認証が必要だから、骨格ごと手が小さく細くなった今はまずクリア不能。印鑑と通帳を窓口に持っていっても、まとまった額を解約しようとすれば「口座名義人本人の確認」や「代理人の身分証明」が必須。
「一歩間違えれば、犯罪者だと疑われて、警察沙汰になりかねないんですよ」
だからもう諦めなさい、と、紗英さんにも重々言い含められた。
女になってみたい、女の快楽を知りたい。その願いを叶えるために支払った代償は、自分の命を除く全て。結果的にはそういうこと。
やっぱりこれ、天罰なのかな。
快楽にずるずると流されるように女になってしまった、報いなのかな。
そんなことを考えて、自暴自棄になりかけた時もあったのだけれど。
「考えすぎですよ、まーや。心配しないで。私がついています」
地下深くにある紗英さんの住居へ同居させてもらって衣食住の面倒を見てもらっているうちに、自分の過去だの財産だの社会的地位だのはほんっっっっっっとにどぉぉぉぉでもよくなった。外に出たいと思ったことすら一度もなし。
だって紗英さんって、高級マンションの一室、ホテルのスイートルーム、老舗温泉旅館の露天風呂、その他いろんな場所をその日の気分で空間ごと取っ替え引っ替えしてるんだもん。残念なのは太陽の光が届かないことだけ。
「空き部屋を魔法で勝手に借用している訳ではないので、心配しないで下さいね。ちゃんと宿泊料は払っていますから。自分の部屋だと思って寛(くつろ)いでくださいさい」
紗英さんの説明によると、彼女には長寿を活かして手に入れた莫大な資産があって、気に入った宿泊施設の一室を買い上げ同然で複数キープしているんだとか。だから衣類はクリーニングに出せばいいし、飲食したければルームサービスを頼めばいい。過去に私がごちそうになった料理もこうして調達されたっぽい。道理で美味しかったはずだ。
「ゴージャス過ぎる……？　いえいえ、これでも最近は控えめになったんですよ」
微笑む紗英さんに全力で突っ込みたかったけれど、でも冷静に考えると、彼女がその気になれば人智の及ばない能力(ちから)で世界を好き勝手に引っ掻き回すこともできるはず。人間社会のルールに則って得た資産から相応の対価を支払っているのなら、充分控えめに生きてることになるんだろう。魔女、恐るべし。

つまり私の立場は、お金持ちに囲われた愛人みたいなもの。紗英さんとイチャイチャしてればOK、他にはなーんにもしなくていい。

それって人としてどうなの？　こんなに自堕落な生活してたら人間ダメになるよね？とかとか、誰しも考えるんじゃないかな。うん、私もそうだった。

でも、そんな私に、紗英さんは微笑みながらこう言った。

「まーやは可愛いんですから、玉の輿に乗ったと思えばいいんですよ」

不覚にも私、その一言で納得。女ってズルいよね。ズルくてごめんなさい。

なので私の心残りは、女になる以前の私を取り巻いていた人間関係だけになった。両親を始めとする血縁関係、会社の上司や同僚、学生時代の友人などなど。私が居なくなったと知ったら少なからず心配するであろう人たちのこと。

もちろん、私がこの姿のまま押しかけて「信じられないかもしれないけど、女になっちゃったんです！」とか熱弁することも一応は考えた。でも現実問題として、とても実行する気になれない。デメリットが多すぎる。

だって、私の言葉を信じてもらえなかったら、頭のおかしい女の子だと思われて終了なんだもん。仮に信じてもらえたとしても、女になった私を女として受け入れてもらえるかどうかは全く別の問題だし。「男だった頃のお前に戻ってくれよ」なんて言われる可能性もゼロじゃないし、言われたところでどうしようもない。

そして結局、この件も紗英さんに相談することになる。

「大丈夫ですよ、まーや。こんなこともあろうかと、もう適切な手を打っています」

本当にこの女は頼りになりすぎ。

ただ、その「適切な手」が具体的にどんなものなのか想像もつかなかったので、ある日の朝食の折、雑談混じりで訊いてみたのだけれど――。

「簡単に言うと、まーやのことを忘れてもらいました」

この日、地下に設えられたのは畳敷きの和室。紗英さんは単衣姿に正座で、ごはん、味噌汁、焼き鮭、卵という純和風なお膳の前で上品に箸を使いながら答えてくれた。いやもうこの女、お作法まで美人だなんて反則にも程がある。

「それ、私に関する記憶を消した、ってことですか？」

私も同じく単衣姿で、紗英さんに結い上げてもらった髪のお陰もあって大和撫子風の見た目にはなっているけれど、一瞬、お茶碗を持ってご飯を口に掻き込もうとしてしまった。紗英さんをお手本に箸使いを学び直す。お母さんの真似をする娘の気分。

「それができれば楽なんですけどね。前にも言ったと思いますが、私は無から有を生み出すことはできません。同様に、すでに存在するものを無にすることもできないんです。そこそこ自由が利くのは、モノの状態や属性を変化させることだけ」

「つまり、こうして空間を切り離して高級旅館の一室を持ってくるとか……？」

「他にも、陽根を陰核にするとか、体内に痕跡しか残っていない膣や子宮を復活させるとか、男の毒を精液に変えて片っ端から吐き出させるとか、触手の群れを洞穴に閉じ込めておいて上手に飼い慣らすとか」

げほげほげほ。咽せた。食べてただご飯が変なとこに入っちゃった。

「あ、あの、私、わざとそういうの言わないように……。今、食事中……」
「あらら、ごめんなさい。そういうマナーとか禁忌の感覚って、実は私、いまひとつよくわからないんですよ」
紗英さん唯一の欠点。ちょっと天然。魔女の茶目っ気と思えば可愛いけれど。
「じゃあ、どうやって私のこと、忘れさせるんですか？」
「まーやは、小さい頃に通っていた学校のクラスメイトの名前、全員憶えてますか？」
「？　いえ、さすがに……」
「それと同じです。当時は記憶していて、今も頑張れば思い出せるかもしれないけれど、普段は思い出そうともしませんよね。今の自分には必要のない情報だと思っているから。人間はもともと、そうやって記憶を整理する生き物なんです」
「つまり、私に関する記憶の優先順位を変化させて、封じ込めた……？」
「まあ、何て適切な表現。素晴らしい。ごほうびに頭を撫でてあげます」
「えへへ……じゃなくて、それ大丈夫なんですか？　きっかけがあったら思い出すってことですよね？　ネットのデータとか、私の写真とか、名前の書いてある書類とか」
「電子化されたものは容易に改竄できますし、紙媒体も私の能力なら好きに変化させられます。ただ、ほとんどのモノは手元に回収した方が早かったので……」
箸を静かに置いた紗英さんが、ぱちん、と指を鳴らす。
――どさどさどさっ。
背後で紙の束が崩れるような音がしたので振り返ると、書類や写真の類が山のようになっていた。何だか、国税局が企業から押収してきた会計資料みたい。
「まーやが女の子になる以前、男性としてこの世に生きていたことの証ですよ。記念写真、学生時代のアルバム、卒業文集、免許、賃貸や保険の契約書、などなど」
「そ……それ全部、紗英さん一人で集めてきたんですか……？」
「もちろん。でなければ、誰かがどこかで昔のあなたを思い出すかもしれませんし」
国税局どころか米国中央情報局も顔面蒼白、土下座したのち裸足で逃げ出しちゃう勢いだった。凄い、凄すぎる。
ていうか、紗英さんはいつの間にこれ集めてきたんだろう。いくら特別な能力があるからって、ここ一週間くらいずっと私と一緒に過ごしていたはずなのに。
「……まーや。少し勘違いしてませんか？」
「？　何を」
「あなたが私に逢うため地下深くへ続く階段を下りて、女の身体へ完全に生まれ変わるまでおよそ一年。もう少し正確には、十ヶ月強の月日を要しているんですよ」
「は……い？」
身体の女性化が進行している最中、私は何度となく気絶を繰り返した。時間の感覚もかなりあやふやで、何時間、何日、何週間経ったのかも判然としなかったのだけれど――よりにもよって十ヶ月？
「男性から女性への変化は、全身の細胞を総取っ替えするようなもの。まーやの生命を脅かすことなく成し遂げるには、変化を待つ時間がどうしても必要なんです。発生した胎児が出産に至るまで、そのほとんどの時間を眠りながら過ごすように」
「……まさか、それで十ヶ月なんですか。十月十日……」

「数字がそうなったのは単なる偶然ですよ？　私の魔法は万能じゃない、と繰り返し言ってきた所以はつまり、こういう部分なんです」
ふむふむ。一年近くの時間があったのなら、私が存在していた痕跡を社会から消すくらい簡単だったんだろう。もちろん、紗英さんならば、という但し書きがつくけれど。
「……その十ヶ月の間、本当に何もなかったんですか？」
「ええ、世は全て事も無し」
「私が姿を消して、悲しんだり、探し回ったりした人は……」
「そういう人を出さないために、対処したんですから」
「い、いえ、それはわかってるんですけど」
また感情が先走ってる。言いたいことが頭の中でまとまる前に、口を動かしてる。
私、何を言おうとしてるんだろう。
ううん、違う。
一体、何を期待して、紗英さんにそんなことを訊いたんだろう。
「ああ、そうだ。せっかくなので、いくつか記念に取っておきませんか」
「記念……？　写真や書類を？」
「ええ。曲がりなりにもあなたの生きた証です。全部捨てるのはもったいないとか、せめて一つくらい手元に置いておこうとか、そう思っても当然でしょう？」
「……」
お膳の前を少し離れて、書類と写真の山の方へ向き直る。
紗英さんが以前言っていた。私は無意識的に、自分が男だった頃のことを忘れたがってるんじゃないかと。その時は今ひとつ納得できなかったけれど、今ならわかる。
男だった頃の過去に、近付きたくない。
当時の名前すらうっかり忘れそうになる、頼りない自分の記憶。それを確かな形で取り戻す絶好のチャンスなのに。どうしてそんなに昔の記憶を遠ざけたいんだろう。
ひょっとして、女の情念の塊である愛の精髄を受け入れたから？　男だった自分を取り戻すと、女としての今の自分があやふやになりそうだから？
どっちも的外れではなさそうだけれど、今ひとつしっくりこない。
ううん、そんな理屈どうでもいい。嫌なものは嫌だ。
「まーや……。また感情だけで物事を決めていませんか？」
紗英さんに窘められる。そんなこと言われても、とは思いつつも、ぐっと唇を引き締め、胸の中の感情を抑え込む努力はしてみる。本当に嫌なのかと自問してみる。
そうしているうちに、ふと、気がつく。
目の前の写真と書類は、私が男だった頃の証。一人の人間の実在を意味するもの。でも、その割には案外少ない。大きめの段ボール箱がいくつかあれば充分収まりそうだ。
「あの……紗英さん。本当にこれで、全部なんですか……？」
「ええ、全部。芸能人やセレブでなければ、こんなものです」
紗英さんの答えは素っ気ない。
何となくショック。昔の私はこんなもの、と言われたような感じがして。
でも、確かに「こんなもの」なのかも。ごく普通の、一人の成人男性。突然消えたところで社会全体は痛くも痒くもないだろうし。私が消えて困るような人なんて――。

こんな時のための、つかず離れずの関係でしょ？

なぜなのかな。不意に思い出した。

私が紗英さんの元を訪ねる前、最後に聞いた、彼女の言葉。

私が居ない間に浮気してもいいよ、そこまで縛ったりしないから。

今にして思えば、彼女との関係すらこんなものだった。

長い時間を一緒に過ごしたのに。何度となく肌を重ねた仲だったのに。恋人のような相手だったのに。ひょっとしたら生涯で一番、気の置けない間柄だったかもしれないのに。

ああ、そうか。だからだ。だから、私は。

自分に大した価値はない、捨てても惜しくないって、心のどこかで思っていたから。

女になる代償として、男であることの全てを簡単に捨てることができたんだ。女の身体で手に入る快楽と、男としての自分を引き替えにしてしまったんだ。

「……全ての男は消耗品である、と宣(のたま)った作家がいるのですけれど」

紗英さんの声。

書類と写真の山から目を逸らし、私は振り向く。

「愛や快楽の意味もわからない、世に何を残すでもない、存在に価値があるのかないのかもわからない。消え失せた次の瞬間からすぐ忘れ去られていく、誰も気に留めない。大多数の男性は、そんな人生を我慢して過ごしているものです。夢や目標を持って力強く生きている逞しい人なんて、本当に一握り……いえ、一つまみ」

「……」

「だから、気に病まないで。男って、元々そういうものなんですから」

消耗品、か。

男は、みんな、使い捨て。

嫌な話だけれど、妙に腑に落ちる。

男を男たらしめる男性ホルモン・テストステロンと、女を女たらしめる代表的な女性ホルモン・エストロゲン。その性質を生化学的に比較する限り、男は女の十倍から二十倍も性的に興奮しやすくて、興奮を抑制する力は女の半分ほどしかないことになる。しかも、得られる快楽は女の数十分の一から百分の一。

性の悦びは生の喜びに通じているのだから、男はただ誰かを愛するだけでは決して満足できない。過剰なまでに「競争」をしたがり、誰かに「勝利」したがる。でなければ、生きている実感を得られないから。

常に飢餓感を抱えて苦しんで、心と身体と寿命を摩耗させていく。だから、生きるのに疲れるとすぐ自棄(やけ)になる。刑務所に収監されている犯罪者も八割近くが男だという。自殺者の七割は男だという統計もある。

それが、男という可哀想な生き物の、正体。

「……でもね、まーや。それでも」

紗英さんが、微笑みかけてくれる。

「私にとって、あなたは消耗品ではありませんでしたよ。今も昔も大好きな人。存在そのものが尊くて、他に替えのない、世界でたった一人の、大切な人なんです」
私は、言葉を失った。
面と向かって誰かにそんなこと言われたの、これが初めてじゃないかな。
何か応えたかったのだけれど、言葉が見つからなくて。
目を逸らして、書類と写真の山の方に向き直り、しばらく黙り込んで。
私はやっと、声を出す。
「……これ、どうするんですか」
「どうもしません。私の手元に置いておけば、目的は達せられるので」
「できれば……処分、して下さい。全部」
「あら。構わないんですか？」
もう一度、私は紗英さんの方に向き直る。
まっすぐに、紗英さんの目を見て。
「紗英さんの側に居られるなら、それでいいです」
よく考えると、答えになっていないのだけれど。
それは間違いなく、今の私の本心。
「わかりました。では」
ぱちん。紗英さんが指を鳴らす。
私が男だった頃の証が、一瞬で砂みたいになって。
瞬きするほどの間に、消え失せた。
「これで、まーやという存在を心に留めているのは、この世で私だけになりました」
「そう……ですね」
何も無くなった畳の上を、しばらく眺めて。
その視線を、ゆっくり、自分の胸元へ移す。
着物の前身頃をやんわりと円(まる)く持ち上げる、二つの乳房。女の象徴。
男だった頃の私が無価値な消耗品だったのなら、こうして女になった私は、一体、何になったんだろう――。
「何だか嬉しそうですね、まーや」
「え……？　嬉しそう……？」
「ええ。そういう心の色をしてますけれど。違うんですか？」
自分でも驚いた。確かにそう。
胸の中にあるのは、なぜか、嬉しい気持ち。
男だった自分と完全にサヨナラしたんだから、むしろ寂しさを感じているはず。理屈ではそう思うのに、どうして嬉しいんだろう？
感情ばかり先走らせず、意図して論理的に。もやもやとした得体の知れない今の気持ちを言葉に換えてみようと、ひとしきり考えてみて。
私は、紗英さんの方に向き直る。
「……以前の私が消えていくたび、今の私が増えていくみたいで」
女になった私がどういう存在なのかは、まだ、わからないけれど。
少なくとも、もう、消耗品ではないと信じたいから。

「紗英さんとの思い出とか、絆とか……そういうのが増えて、女としての自分がちょっとずつ、一人前になっていくみたいで……それが何だか、嬉しくて」
笑顔で、そう、伝えてみる。
紗英さんも、笑顔を返してくれた。

その時を境に、私は一つの目標を得た。
ちゃんとした女に、立派な女性（レディ）になること。
心や身体はとっくに女そのものだけれど、それでも、以前男だった頃の習い性は時々顔を出してしまうから。さっきの朝食でうっかりごはんを掻き込もうとしたりとか。注意していなければ女らしく振る舞えないって、それは女としてどこか変だと思うし。
幸いなことに、私の身近には、紗英さんというこれ以上ないお手本があるのだから。
二十四時間、三百六十五日、一時の隙もなく「女」になれるように。
飢餓感を抱えて苦しみ続ける可哀想な生き物だった頃のことは、全部捨てて。
満たされて、心穏やかで、優しくて、綺麗で、可愛くて。
そういう女性を目指していこう。

――なんてことを、決意した矢先から。
「地下（ここ）を出て、私一人で暮らせ、って……え？」
就寝前、ドレッサーの前に座って慣れない手付きで長い髪をまとめている最中、いきなり紗英さんから告げられた。一瞬自分の耳を疑ったけれど、間違いなくそう言った。
「あ、あの、どうして……。意味が……」
振り返ると、紗英さんはとっくに長い髪を編み終えてベッドに上がっていた。ネグリジェを着た身体を横たえて枕に頭を預けつつ、眠そうな目を私の方に向けてくる。
「まーやには、何の落ち度もないですよ……。ごめんなさい、私の都合です……」
あくび混じりの、紗英さんの声。
何だか珍しい。紗英さんがあくびなんて。初めて見るかも。
「細かいところに……気がつきますね。いい奥さんになれますよ、まーや……」
冗談交じりに言いつつ、紗英さんがまたあくび。
「ここ数百年、こんな間抜けなこと、したことなかったんですけど……。ここ数日、頑張りすぎました……。眠いんです、すごく……」
「いや、眠そうなのは見ればわかりますけど」
「私は、人間ではないので……睡眠も、食事も、本当は……必要が、なくて……。これまでは、まーやにつきあっていただけで……いえ、嫌々ということではなくて……ちゃんと、楽しみながら……ああ、いけない、話が脱線しそう。本題は……そこでは、なくて」
目元を手で擦りつつ、紗英さんが言葉を続ける。
「まーやの願いを、叶えるために……女の子にするために、私は相当、能力（ちから）を消耗していて……。人間で言えば、体力に相当する……そういう……もの」
「魔法を使えば魔力が減る、ってことですよね？」

「そう……ですね、そう考えて……問題、ない……。それで、その……私自身が思った以上に、まーやが可愛くて……だんだん私に心を開いてくれて、懐いてくれるあなたが、可愛くて……可愛くて、可愛くて、可愛くて可愛くて可愛くて、本当に可愛くて……」
「いやあの、その、リアクションに困るので、話を進めて下さい」
「あなた楽しませてあげよう、可愛がってあげよう、退屈させないように……なんて考えて、あっちこっち、いろんな場所へ……ホテルとか、旅館とか、そういう……」
薄々思ってたけど、紗英さんにとっての私って、恋人っていうよりペットに近いんじゃないかな。あるいは玩具（おもちゃ）。大事にしてもらえるならどっちでもいいけど別に。
「でもね、まーや……。言うまでも……ないですけど、空間、転移……ああいうの、結構、大変で……割と、疲れるんです、よね……」
ぱちぱちぱち。目を何度も瞬かせつつ、私は紗英さんの言葉を頭の中で咀嚼する。
えーっと、これは、つまり。
「紗英さんはもともと魔力を多大に消耗していたのに、私を楽しませたい一心でさらに魔法を使い続けて、すっかり疲れ切ってしまったので、眠くて眠くてたまらない？」
「まーやは……賢い、ですね……。こっち、来て……頭、撫でてあげる……」
私、盛大に溜息。天然にも程があるってばもう。
「あの、私の頭なんて撫でなくていいから遠慮も無理もせず今すぐ目を閉じてぐっすり寝て下さい。満足するまで何時間でも何日でもいくらでも」
呆れ気味に言いつつ、紗英さんに背を向けて再び髪を編み始める私。だってこっちの方がよっぽど大事だもん。
「まー、や……まだ、話、終わって……ない……」
「いいから寝て下さい、続きは起きてからで」
「だめ……です、よ。そんなこと、したら、あなた……死んでしま……う……」
「いえいえ私はウサギじゃありませんから。紗英さんにかまってもらわないと寂しくて死んじゃうとかそんなこと全然ないですから。大丈夫ですから」
「だって、このベッドルームも……魔力で、維持……して……。私、寝たら……それ、止まる……魔法、止まって……だから……」
「……」
「そもそも……ここ、地下……本当は、岩盤……。私、眠ったら、石の中で……。私は、別に……何とも、ない、ですけど……まーや、は、人間……窒息――――」
紗英さんの言葉の最後が、消え入るように小さくなって。
慌てて振り返ると、紗英さんの顔に表情がない。そして穏やかな息。すぅ、すぅ、すぅ。徹夜とかして眠くて眠くて仕方ない時、ふと意識が途絶えるというか、気絶するというか、そういう感じで眠りに落ちるあの雰囲気。
目の前の空気が、少しずつ固まって、黒く、ざらざらし始めた。
空気がだんだん岩になる、としか表現のしようがない、何とも変な感じ。
私の肺の中まで、石になり始めた。
う、うそ、冗談でしょ、なんて声を上げることもできない。だって喉の中も石なんだから。一気に意識が遠のく。死の危険を察した本能が大騒ぎを初めたけれどもう遅い。何もできない。苦しい、窒息する、だめ、死んじゃう、死んじゃう死んじゃう死ッ――。

「……あ、っ」
はたと気がついた様子の紗英さんが、目を開く。
空気が元に戻る。息苦しさが嘘みたいに消えた。
その瞬間、私はドレッサーの椅子を蹴って飛び上がる。後ろの方で乳液とかコスメ類がひっくり返ってどんがらがっしゃんと音を立てたけど気にしてる余裕なし。紗英さんの身体に全力でしがみついて身体を揺さぶる。全力で。それはもう全力で。
「さ、紗英さん、寝ちゃダメ！　起きててくださあああぁぁぁあぁあいっ!!」
「だ、いじょ……ぶ、ですよ、明日の、朝くらい、まで、保ちます……」
「いやいやいやいや嘘つかないでさっき絶対一瞬だけど気絶したでしょ?!　今の紗英さんの横で呑気に寝てるなんて絶対無理ですから！　命の危機はまったなしですよ今すぐ対処しましょう！　一刻も早く！　ナウ！　ハリィ！　クイックリィ!!」
「そんな、急いでも……今、夜中……。明日の、朝でも……」
「今すぐにでも気絶しそうなその様子で翌朝まで徹夜するなんて無理ですよ無理無理無理ぜえったい無理！　えとえと、要するに私が地下から出ていけばいいんですよね?!　急いで着替えて外出できるように準備しますから！」
私は編みかけの髪をほどいてパジャマを脱ぎ捨て、素っ裸に等しいショーツ一枚の格好で寝室横のクローゼットをばーんと開く。身体を大きく動かすたびに胸元でおっぱいが上下左右にぷるんぷるんと跳ねて揺れて邪魔でしょうがないので、左手で胸元を抱えるようにしながら――あ、女の人が裸になると胸元を押さえたがるのって、単に恥ずかしいだけじゃないのかも――大急ぎで服を選び始める。
「でも……一晩、じゃ、済まない……ですよ、一ヶ月、くらい……」
今にも眠ってしまいそうな消え入りそうな声が飛んできて、私の背中に突き刺さる。
「……一ヶ月？　今、一ヶ月って言いました？」
「そう……。普段、寝たり、しないから……。一度、寝ると……かなり、長く……」
右手に抱え込んでいたワンピとブラとスリップが、ばさばさと音を立てて床に落ちる。
今の私は全面的に紗英さんに依存して生活してる。事実上の一文無し。今すぐにこの地下を飛び出してしまったら、別の意味で死んでしまうんじゃないのかな――そう、具体的には餓死とかで。
「ああっやっぱり紗英さんに頼りすぎてたんだそのバチが当たったんだ！　たとえ正社員でも定年までの保証どころか大企業すらいつ倒産しても不思議じゃないデフレ不況のこのご時世では女もある程度経済的な自立を確保しておくのが鉄則でした！　今すぐ職業安定所に行って就職活動しなきゃ……って夜だし閉まってるよぉーっ！」
完全に取り乱した私は両手で頭を抱えておたおたわたわたし続ける。今度はもうおっぱいがぷるんぷるんするのに構ってる余裕もない。どうしようどうしようどうしよう！　ふと気付くと、そんな私を見た紗英さんが眠気で目をしょぼしょぼさせつつも楽しそうに笑っている。いや笑い事じゃないですから！　切実な問題ですから！
「だいじょう、ぶ……まーや、心配、しすぎ……」
紗英さんが手を上げて、いつものように指をパチン。音はほとんど鳴らなかったけれど、その手の中へ手品のように一枚の黒いカードが現れる。ていうか魔力使わないで下さい私石の中で窒息しちゃいますから！

「必要に、なるかな……と、思って……。作って……おいて、良かった……」
紗英さんが、カードを差し出してくる。
何だろう、これ。クレジットカードみたいだけど。
「まーやの、ですよ……。口座は、私の……。だから、自由に、使って……」
私はカードごと紗英さんの手を両手でしっかと掴む。さすがですご主人様、まーやはあなたのためならペットでも奴隷でも何にでもなります、一生ついていきます！
「ああ、いい……ですね、今度、そういう……プレイ、しましょうね。約束……」
「しますします約束します！　だからもう少しだけ頑張って起きていて下さい！」
私、再び着替えを再開。この一週間で女物の服を着るのにもそこそこ慣れたはずなのに、ブラがなかなか上手に着けられなくて悪戦苦闘。ああもうフロントホックなのに！　落ち着きなさいよ自分!!
「ごめんなさいね……まーや。迷惑、かけて……」
「いえ別に迷惑だなんてちっとも思ってないですただもうちょっとだけせめて一日前くらいに気付いて欲しかった……っ、ホック留まった！　次、ソックス！」
「ねえ、まーや……着替え、しながら……聞いて……。本当は、明日……言う、つもり、だった。ん……ですけど、今、外に……出るなら、どうしても、お話……しないと……」
「是非！　是非そうやって喋ってて下さい！　うっかり寝ないためにも！」
クローゼットをひっくり返す勢いで衣類を漁り続ける。外は肌寒い季節になってるはずなので、それなりに暖かい服を探す。男だった頃は「お約束のコーディネイト」さえ押さえておけば良かったけれど、女の服はそうもいかない。ソックス一つにしても色の組み合わせとか選択肢が多すぎて多すぎて――ああもうめんどくさいっ！
「実は、ね……まーや……。私は、地下（ここ）の……他に、もう、一ヶ所……。現世、から、空間、を……切り離して……隔離……して、いる……場所が、あって……。私が、眠ると……その、場所……現世……繋がる……元に、戻る……んです。それ、は、まーやに、とって……重要な、場所で……」
「……？　私にとって？」
クローゼットをひっくり返す勢いで衣類を漁っていた私の手が、止まる。
「まーやが、以前……住んでた、部屋（マンション）……です、よ」
言われるまでさっぱり思いつかなかった。そういえば賃貸（1DK）に住んでたっけ、私。
「書類、写真……とか……それの、延長線上……で、まーやの、手がかり……ありすぎ、る……から、封印……誰も、入れない……ように、した……ん、です……」
「じゃあ、部屋そのものは、十ヶ月くらいそのまま？」
冷蔵庫の中とかどうなってるのかな。ナマモノは入ってなかったはずだけど。家賃もどうなってるんだろう。引き落としとか自動じゃなかったような。
「契約書、けさ、処分……。大家も、管理人も……部屋ごと……まーや、の、こと……忘れて、る……けど、でも、その部屋……元に、戻ったら……」
住人が失踪してると判断して、警察に連絡するだろうか。それとも、十ヶ月ぶん未納になっている家賃の回収を考えるだろうか。
どっちにしても、話は管理人や大家のところで終わらない。いろんな人たちが連鎖的に、私のことを思い出すきっかけになりかねない。

「人の、意思は……魔力、みたいな……もの、だから」
困ったような顔をして、紗英さんが呟く。
「おかしい、変だ、と……たくさんの、人が……思うと……みな、何か……答え、探して……納得、するまで……。最悪、私の……魔法、を、打ち消す……ような……こと、に、なる……かも、しれないから……」
「ひょっとして……私、元に戻る、とか？」
ぞっとしない話。また男に戻らなきゃいけないなんて。
「いいえ……それは、有り得ません……。まーやの、身体……愛の精髄（ラブ・コア）……大勢の、女性たちの、情念を、得て……完全な、女に……それは、もう、現実、です。覆せる、はず……ない……。でも……あなたの、存在に、悪い影響……何か、出てくる、かも……」
そこで紗英さん、またうっかり眠り込みそうになる。今度は事前にその気配を察してダッシュで近寄り、私は紗英さんのほっぺたをぺちぺちと叩く。
「だから……まーや、先に……その部屋、あなたのマンション、行って……」
「？　今の私がですか？　この姿で？」
「たとえば、妹、とか……そういう、ことに……して……。賃貸、契約書……どうせ、ない、から……親が、保証人、だった……とか、最近、亡くなった……とか、そういう、ことに……。それで、家賃、未納分……納めて、それから、解約……。そうすれば……」
なるほど。管理人も家主も店子（たなご）のプライバシーになんか興味はないだろうし、十ヶ月分の家賃さえもらってしまえば、それ以上問題が広がらないと。
「そんなに悪知恵の働く人が、何で魔力を使い果たすようなポカミスを……」
「だから……まーやが可愛くて、可愛くて可愛くて可愛くて可愛くて……」
「わかりました、わかりましたから、それはもうわかったので」
女として幸せになろう、と覚悟を決めたつもりなのに、可愛い可愛いと連呼されると恥ずかしくて仕方がない。誤魔化さずに素直に喜んだ方がいいのかなぁ。
「……よしっ。着替え終了っ」
ジャケットにお気に入りのワンピース、足下は少し厚手のタイツ、靴は少しだけヒールのあるショートブーツ。色合いは地味めだけど悪くはない。うん、我ながらどこに出かけても恥ずかしくない、まともなコーディネートだと自画自賛。
「ん？　この服、ポケットがない……？」
クレジットカードとマンションの鍵を収めようとしたんだけど、入れるところがどこにもない。いくら何でもポケット一つもないなんてことはないよね？　ポケット、ポケット、ポケット――あれ？　あれれ？
「まーやは……女として、お出かけ、したこと、ないですからね……。女物の服は、ポケット、なかったり……仮にあっても、飾りだったり……します、から……」
ぱちん。紗英さんがまた指を鳴らすと、私の目の前に小さなバッグと財布が現れる。
「財布……私のを、貸してあげます……まーやのもの、ひとつも買ってないので……」
「有り難くお借りしますけどもうやめてください魔法使うのお願いだからっ。指がぱちんと鳴る度に私の心臓も止まりそうになるんですっ」
カードを財布に収めて、バッグを持つ。
準備万端。これでいつでも外へ出られる。

「向こうの……壁に、金属製の……。不自然な扉が、あるので……」
「それが出口で、地上に繋がってる？」
「ええ。……少しだけ、お別れですね、まーや」
急に、しんみりした声。
そうか、ここで紗英さんと離れたら、一ヶ月先までもう会えないんだ。
ちゃんと挨拶、しておかないと。
「紗英さん、起きたら連絡、もらえますよね？」
「ええ、迎えに……行きます」
「待ってます」
「それと……最後に、二つ、まーやに、お願い……気をつけて、欲しい、こと……」
紗英さんは歯を食いしばり、眠気を一瞬振り払って、すごい真剣な顔をする。
このタイミングで言うくらいだから、よっぽど重要なことなんだろう。私も顔を引き締めて、聞き漏らしがないよう耳に神経を集中した——んだけども。
「ひとつめ……。お手洗い……シャワートイレ……気をつけて……」
私の目が、点になった。
「まーやの、だいじな、とこ……から、時々、出てくる……ねとねと……あれ、正常……普通、なんです……よ。おりもの、って……わかり、ます、よね……？　まーやは、ビデ使いすぎ、洗いすぎ……。私が、膣内射精（なかだし）した、精液と……勘違い、して、奥まで、しょっちゅう……洗おうと……してる、みたい……だから」
「な、っ、何でそんなこと知って……まさか覗いてたんですか?!」
紗英さん、無言でにっこり。
こ、こここっ、この覗き魔！　変態!!　何やってんですかあなたはっ！　ていうかそれも魔法とか使ってたんですよね?!　今こんなになってる原因の一つですよね?!
「あれ、ダメですよ……。女の子の、股間、は……少し、湿ってても、いい……綺麗に、しすぎても……逆効果……。溢れた分だけ……拭き取る、ように……。かゆみ、違和感、臭い……そういうの、なければ、平気、大丈夫……」
「そんなの今言わなくても！　っていうか正直どうでも！」
「よくない……です、よ。それと、小さい方の、後も……擦りすぎない、ように、雫を取る……感じで……。大きい方も……いきなり、ウォシュレット……ダメ、ですよ……。洗った、あとの……汚い、水、前の方に、行くから……一通り、拭いて……前から、後ろに向けて……必ず。それから、水流、弱めで……」
「ああもう！　なんかしんみりしてたのに！　ちょっといい雰囲気だったのに！　何でそんな下（シモ）の話ばっかり！　いろいろ台無しですよぉ！」
「でも……大事な……こと、ですよ……」
「そうだとは思いますけど！　それはわかるんですけど!!」
「何だかんだ、言って、まーやは……まだ、本当の、意味では……ちゃんとした、女の子……じゃ、ない……ん、です……よ。抜けてる、ところ……たくさん……。一人で、暮らしたら……きっと、いろいろ、困る……こと、出てくる……から」
「……」
私のこと、心配してくれてるんだ。これでも。

「次、二つ目……。おとこの……ひと、には、気を、つけて……」
「男？　ですか？」
やっぱり何のことだかわからなくて、私はまた首を傾げる。
すると、紗英さんの顔がまた真剣になる。今度はほとんど睨むみたいにして。
「浮気、しちゃ、ダメ……ですよ……」
それを聞いた私、思わず、ぷっ、と吹き出してしまった。
「笑い、ごとじゃ……ない、ですよ……？　まーや……」
「ごめんなさい。でも、そんな……有り得ないし」
「どう……して……？」
「いや、どうしても何も。有り得ないものは有り得ないので」
「まーや、の……心も、身体も……今は、もう、女の子……ですよ。理屈抜き……で、男性……に、惹かれる、こと……ない、って、言い切れ……ますか……？」
「いえ、それ、理屈抜きって言うか、どっちかって言うと理屈ですよね？」
女は男に惹かれるものだ、という理屈（ロジック）。
理屈抜きで私の心の中へ問いかけるなら、私が男に惹かれるなんてそんなの絶対有り得ない。眠っている紗英さんを忘れて、イケメン相手に胸をときめかせて手をつないで抱擁を交わしてキスをして、あまつさえそれ以上の――あああ、サブイボ立ってきたっ。
「初恋、を、経験……する、前の、女の子……って、大抵、そんな感じ……ですよ」
「……」
「街に、出たら……嫌でも、思い知る……。男と、女……陰と陽……自然と、引き合うもの……。あなたは、今、真っ白の……無垢な、まま……だから……」
「いや、あの……。紗英さん。ホントにそれ、心配し過ぎなので」
「……でも……」
紗英さんの気持ちは、何となく、わかる。
浮気を心配するのはきっと、紗英さんが私に執着してくれているから。本当に私のことを好きでいてくれてるから。惚れてる相手と一ヶ月も別れるって思えば、それはもう不安になるのが当たり前。それはそうなんだろうけど。
ああもう、言葉を選ばずはっきり言おう。
「あのですね。私、もともと男だったじゃないですか。男として大人になって、それから女になったので。男がどれだけ愚かでスケベでしょーもない生き物か痛いほど知ってます。男と恋なんか絶対にできません。って言うか、私、紗英さんに……その、えっと……子宮、で、イきっぱなし……と、とにかく、そんなことまで経験してるんですよ。初恋前のウブな女の子みたいな扱いされても困ります」
「だから、こそ……。一ヶ月も、放ったらかし……なら、そういう、欲求……」
「ないです」
きっぱり、言い切る。
これについては、一切迷うことなく、断言出来る。
「私は、紗英さんのお陰で満たされてますし。心も、身体も。男だった頃の数十倍とか、数百杯とか、そんな……その、えっと、物凄い……イかされ、方……ああもう、とにかく、他の誰かと寝たいなんて思いません。一ヶ月くらい平然と待てますから」

それは、女になってみなければ、本気でイってみなければ、絶対にわからないこと。
女にとってのセックスは、快楽であると同時に苦痛でもある。
女がイく時って、もう、イって、イき続けて、イかされ続けて、本当に死ぬかと思うほど強烈な絶頂を何度も何度も味わわされて、好き勝手に胎内(おなか)を揺さぶられて、神経も焼き切れそうで、意識も朦朧として、精も根も尽き果てて、指一本動かすのも億劫なほど体力を消耗してしまう。死にそうなほどの苦痛と表裏一体。男みたいに、スポーツ感覚で身体を動かして、いい汗かきながら女の痴態を間近で見ながらニヤニヤして、最後に射精してちょっとだけ気持ちよくなるとか、そんなのとは根本的に次元が違う。
だから、男みたいに、しょっちゅう「したい」と思わない。好きな人が求めてくるから応じる、という形になる。そうなってしまう。
現に今の私がそう。一ヶ月ほど紗英さんと会えないんだと思っても、そんなに長い間我慢しなきゃいけないんだ、なんて全然思っていない。紗英さんのテクニックと力強い疑似陽根(ペニス)に、子宮が完膚無きまで叩きのめされてるから。
「……紗英さん以外のひとなんて、欲しいとも思いません」
私は、ほんの少しだけ、拗ねたような顔をして。
「そのくらい、凄いこと……何度も、何度も、何度も……されたんですから。それこそ、理屈じゃ……ない、ですよ。……だから、安心して下さい」
これで、やっと、紗英さんが笑う。
「本当に、まーやは……可愛い、ですね。愛してますよ……信じます」
私も、自然と笑顔を返していた。
ちゃんと心が通じてる、そんな気になる。
「言いたいのは、それだけ……。じゃあ、いってらっしゃい、まーや……」
「はい、行ってきます。……お休みなさい、紗英さん」
「お休み……なさい。まーや……。また……来月……」
話が終わったせいか、紗英さんは安堵して目を閉じる。
「えっ、ちょっ、あの、まだ私、外に出てな……」
部屋の空気が、また、岩盤と混ざり始めた。
「うわああっ!!」
バッグを掴んで慌ててダッシュ。今の姿になる以前に潜って以来、一度も使ったことのなかった外への扉を蹴り開けるようにして外へ。神社の石段並みに長い階段を猛然と駆け上がる。けれどなかなかイメージ通りに上へ進まない。息もすぐ切れる。でも、もたもたしていたら冗談抜きで死んじゃうかもしれないし、必死で足を動かす。上へ、上へ――。
「……っ、着いた!」
十ヶ月ぶり、久しぶりの地上。火照った身体には有り難いひんやりした夜の空気を味わう間もなく、自分が飛び出してきた階段の出口を振り返る。
でも、そこにはもう、地下へ続く階段はない。消えてしまっていた。
「ぎ、ギリギリセーフ……」
安堵しつつ、地面に向けていた視線を上げる。
何気なく、周囲に目をやる。

私が小さい頃に暮らしていた街。とある駐車場の片隅、貯水槽の陰。紗英さんを訪ねてここへ来た十ヶ月前と何も変わっていない。ごくごくありきたりの、どこにでもあるような、何の変哲もない景色。

目に映るもの一つ一つのディテールが、あまりにも現実的だった。

自分が生まれた現実の世界に戻って来た——そんな感慨が湧いてくる。ずっとセレブみたいな異世界の生活をしていたから、よけいそう感じるんだろうな。

でも、紗英さんとの生活は、夢でも幻でもない。

何気なく、自分の胸元を手で触れてみる。

掌に感じる、乳房の柔らかさ。女になった自分——確かな現実。

「でも……この貯水槽、こんなに大きかったっけ……？」

ガリバー旅行記に出てくる巨人の国に迷い込んだような——ってほど大袈裟じゃないけど、違和感があるのは間違いない。駐車場もやたら広く感じる。以前なら十歩くらいで済んだ距離が、その倍近い二十歩近くかかっているような。

あ、いやいや、それで当然なんだ。

自分の背丈が、頭二つ分くらい縮んでるんだから。

モノの大小とか、広さ、距離を直感的に把握する時って、結局のところ自分の身体を基準にしてるはずだもん。世界全体が三割くらい大きくなってる感じなんだ。

「……とりあえず、今夜の宿、探そう」

駅前にビジネスホテルがあったはずだと思い出し、深夜の町へ歩き出す。

大股で颯爽と歩くのが一番格好良かった頃の記憶を、ヒールつきのブーツで小刻みに、たおやかに踏みしめ、上書きしながら。

翌朝早くに目覚めた私は、通勤ラッシュが始まる前の電車をいくつか乗り継いで、自分が住んでいたマンションへと戻ってきていた。

「本当だ……。お嬢ちゃんの言う通り、部屋がある……」

一緒についてきた管理人のおじさんが、首を何度も傾げつつ部屋の扉を何度も触って確かめる。紗英さんが眠ってしまうまで扉そのものが消えていたのかもしれないけれど、上の階と下の階の同じ場所には当然のように部屋があるはず。ここだけ部屋がないってことを一年近く一度も不思議に思わなかったんだろうか。

「いやはや、毎日なんとなく繰り返しで仕事してると、こんな大きなものを見過ごしたりするようになるんだろうな……。年のせいだとは思いたくないねえ……」

何だか都合良く納得してるみたいだし、放っておこう。

「とりあえず、大家さんに連絡してもらっていいですか？　家賃の未納分はちゃんと払うので、すぐにでも解約をお願いします。部屋は私が片付けますから」

言いつつ、私は玄関の扉を解錠。中に入ろうとドアノブを捻る。

管理人のおじさんが、私の顔をまじまじと見つめているのに気がついた。

「……あの、何か」

「そうそう、そうだ。思い出した。どことなく面影あるよ」

「はい……？」

「この部屋を借りてた、君のお兄さん。去年の今頃まで確かに住んでたよ。おかしいな、何で忘れてたんだろうね。歳は取りたくないなあ」

思い出さなくていいのに。当の本人もその頃のこと忘れかけてるんだし。

「しかし、こんなに可愛い妹が居たんなら、お兄さん、さぞ鼻が高かったろうねえ。いや、お世辞じゃないよ？　おじさんの本心さ」

何だろう、この管理人。妙に馴れ馴れしいんだけど。

私の記憶にある限り、この男は無愛想を絵に描いたような人のはず。コインランドリーに使う小銭がない時に両替できないか頼んだら「そんなのは管理人の仕事じゃない」とか言って拒絶、ゴミ出しの曜日をうっかり間違えただけですごい怒られて――そうそう、紗英さんから送られてきた女の毒が入った小瓶に怯えて投げ捨てた時も。管理人にたまたま見られていて、犯罪者を糾弾するような冷たい目を向けてきたっけ。

「じゃあ、大家にも連絡してくるから。待ってて」

階下に駆け下りていく後ろ姿を冷めた目で眺めつつ、確信。

うん、こんなフレンドリーなこと言うおじさんじゃなかった。

ははーん。私が若い女だってだけで、こーんなに対応が変わるんだ。最ッ低。何なのあのオヤジ。男には厳しく女には甘いなんて――。

ん？

それって、普通だよね？　大多数の男がそうだよね？

ひょっとして、昔の私もあんな感じだった？

あのおじさんほど極端じゃなかった、と思う。節度もあった、と思いたい。けど。

今ひとつ、自信が無い。

だって「可愛い女の子のすることなら何でも許しちゃうよー、でも男は死ね」なんて臆面も無く公言してたし。女の子に優しいのが紳士だと勘違いすらしてた。友人知人もたいてい似たような感じだったから、まったく疑問にも思わなかった。でもでも、よくよく考えると、本当の紳士って男女関係なしに礼儀正しく親切であるべきだよね。女にだけ甘いってのは「俺は若くて可愛い女の子ならみんな下心で見てるよ」って言ってるのと大差無いもん。あの見苦しいおじさんみたく。

「……男って、最低」

若い女の子が言いがちなその台詞を、まさか自分が実感込めて呟くことになろうとは。

とにかく、部屋の中へ入る。

空間ごと切り離して隠していた、という趣旨のことを紗英さんが言っていたけれど、確かにそんな感じ。そこそこ広い１ＤＫの部屋は私の記憶と何の変わりもない。男のにおいみたいなものがうっすら漂っていたけれど、窓を全開にすればすぐに薄れていった。テーブルにも床にも埃は積もっていなくて、十ヶ月前と何も変わらず綺麗なまま。

そう、綺麗。綺麗すぎる。昔の私って、そんなにマメに掃除してたっけ？。

あなたが寝ている間に、洗濯と掃除、しといたから。

そうだ、彼女が――あの女が。最後に泊まりに来た時に。

あの女、今、どうしてるんだろう。気にならないと言えば嘘になる。

「……ううん、気にしたって、仕方ないよ」
ほとんど無意識に、自分に言い聞かせるように、まるで正反対の言葉を呟く。
男の頃の記憶なんかどうでもいいと思っているなら、その頃につきあっていた女だって同じくどうでもいいと考えるべきだ。向こうもどうせ、紗英さんの魔法で私のことなんかすっかり忘れて、大好きな仕事に没頭してるんだろうし。休日の暇つぶしに最適な代わりの彼氏だって、とっくに見つけてるに決まってる。
忘れよう。彼女のことなんて。
今の私には、女になった私には、もう、どうでもいいこと。
――がちゃっ。
背後で誰かが扉を開く音がして、私は現実に引き戻される。
「ええと、まーやさん、でしたっけ。大家に連絡してきたんだけどね」
管理人だった。
「未納分の家賃の請求書と領収書作って、すぐこっちに来るって。向こうもあんたのお兄さんと賃貸契約交わしたの、すっかり忘れてたみたいでね。私より十は歳取ってるから、ボケちゃってんのかもね。ダメだねえ」
その過剰なフレンドリーさが本当に気持ち悪いんだけど、その気持ちをなんとか胸の中で留めて顔に出ないように堪え、何とか微笑みで受け流す。無愛想な親父さんだと思っていた昔の方が好感度が高かったなんて、何だか皮肉な話。
「ただね、まーやさんが言ってた、今日中の契約解除ってのはできないってさ」
「……？　え、どうして」
「まーやさん、まだ若いから知らないのかな。賃貸って、解約する一ヶ月以上前には連絡もらわないとダメなんだよ。そういう決まりだから」
いけない、そう言えばそうだった。すっかり失念してた。
「おじさんはねえ、十ヶ月も放置しといて契約もへったくれもないだろ、サービスしてやんなよって、そう言ったんだけどねえ。大家がケチでねえ。この時期に入居者が見つかる可能性は低いとか何とか屁理屈こねてさ。ごめんよ、力になれなくて」
そんな「俺は君のために頑張ったんだぜアピール」は要りません。それでおじさんに対する好感度が上がったりしませんから。
「？　あれ、ちょっと待って下さい。要するにこの部屋、一ヶ月先まで嫌でも借り続けなきゃいけない、ってことですよね」
「そうだね、そうなるけど」
私は、腕を組んで少し考え――ようとして、乳房の膨らみが邪魔で男性のようには腕が組みづらいことにはたと気付き、その少し下で腕を絡ませるようにして、考える。
いや、考えたり悩んだりする必要もないや。
「じゃあ、私、来月まで、ここに住みます」

それ自体は悪い選択じゃなかったと思う。紗英さんがどれだけの資産を持っていようと、無駄なお金を使わずに済むならそれに越したことはないし。どうせ一ヶ月分の家賃を払わざるを得ないなら、いっそ住んだ方が断然いい。

ただ、予想外だったのは。

「……居心地悪いなあ、この部屋……」

ベッドが置いてあるフローリングの洋間をぐるっと見回してみて、溜息。

機能一点張りのシンプルな家具やカーテン。色彩らしいものはほとんどなくて、ほぼモノトーン。面白みの欠片もない。以前はこれが自分の好みに合っていたはずなのに、一人で冷静になって「何ヶ月もここに住むんだ」と考えたらだんだん気が沈んできた。

元々は自分の部屋なんだから、下手にホテル住まいするより寛げるだろうと思ったのに。こんな殺風景な場所でずっと暮らしていた過去の自分が信じられない。

「きっと、それだけ私自身が変わってる、ってことなんだろうな……」

いつだったか紗英さんが言っていた。男は物体の形状を感じ取る能力が高くて、凝ったデザインや洗練したシルエットに惹き付けられるんだって。だとすると、物体の形状が把握しにくくなる鮮やかで明るい色は、自然と忌避しがちになる。男に人気のある色がおおむねダークトーンなのは、多分そこに起因してるんだろう。逆に女は色彩に対する感受性が高くて、カラフルなものをほぼ無条件で喜ぶ傾向があるそうだ。

これはもちろん、個人の趣味嗜好や経験的なものでいくらでも覆る程度のものだろうけど、男から女に変わったばかりの私には、性差による感性の違いがはっきりわかって当然。それに、家や部屋の相は、そこに住む人の「心のかたち」を引き写したものだとも言うしね。男だった頃の部屋がそのまま今の私にフィットするはずがない。

ん、決めた。

模様替え、しよう。

ジャケットを脱ぎ、髪をポニテにまとめて、上着の袖をまくり上げる。

「どっちみち、男物の衣類とか、もういらないんだし……」

ぽいぽいぽい。収納スペースの衣類を片っ端から引っ張り出して、ビニール紐で縛り上げて廊下に出す。寒々しい色のカーテンとかラグマットも丸めて縛って粗大ゴミ。

でも、すごく大変。そんなに大仕事してる訳じゃないのに、汗が額をたらたら流れる。どの荷物もやたら重い——というか、私の腕力がなくなっただけかな。女になって初めて、ちょっと損したかも、って気分になる。

でも、それは気のせい。やっぱり女になった方が得だった。

「大変そうだねえ、良かったら手伝おうか」

頼んでもいないのに、管理人が手伝いに来て下さいましたので。

わあい、おじさん大好き。そんなウソっぽい笑顔を装うだけでおじさんは嬉しそうに働いてくれる。力仕事は男の仕事だよ、とか嘯きながら何でもやってくれる。

「まーやちゃん、このソファとかも捨てるつもりかい？　じゃあ、おじさんが一階の集積場まで持っていくよ。なあに、業者さん来るまで置いておくから、大丈夫」

ふーん。私が男だった頃は、ゴミ出しの曜日をうっかり一日間違っただけで睨み付けたのに。女の私が出した粗大ゴミは数日くらい笑顔で引き取ってくれるんだ。おじさん最低。死んじゃえ。っていうか「ちゃん」付けで呼ばないでキモいから。

でも、そういう本音はおくびにも出さない。表面だけの笑顔を取り繕って「ありがとうございます、よろしくお願いします」を連呼。男だった頃には考えてることがすぐ顔に出てたものだけれど、今はほぼ完璧にごまかせてる自信がある。

ひょっとして、これも性差のうちなのかも。女の脳は他人とコミュニケーション取るのに都合のいい構造になってる、みたいな話をどこかで聞いたような気もするし。それを悪用すると、若い女の子に気に入られたいって下心で駆動してるおじさんの一人や二人、こうして顔色伺いながら上手にコキ使えちゃったりするわけだ。

うわー、女って怖いねー。自分で言うのも何だけど。

「もう大丈夫？　じゃあ、また何かあったら呼んで。いつでも管理人室にいるからね」

結局、おじさんは私の本音に気付くこともなく、上機嫌で帰っていった。

ほんと男って馬鹿すぎ。消耗品扱いされても致し方なし。

「でも……。おじさんのお陰で、だいたい片付いたかな……」

今の自分の趣味に合わないなーっていうインテリアは、ほぼ全部なくなった。今は単に素っ気ないだけ。ここからは「何を足せばいいか」って段階かな。

なので、歩いて数分の距離にある近場のホームセンターへ出かけてみた。

紗英さんからもらったクレジットカードのお陰で資金力には何一つ不安はないので、必要そうなものは思いつくまま片っ端から買いまくる。

「あ……あは、あはは、うふ、ふふふ、ふふふふっ、うふふっ……」

顔がにやけて仕方がない。楽しい。楽しすぎる。脳内麻薬がドバドバ出て瞳孔が開いてるのが自分でもわかる。危ない人みたいだ私。

ふと「買い物依存症」って言葉が脳裏をよぎる。女の人が陥りやすい困った精神疾患。狩猟採取時代にまで遡る大昔、住居の近くで木の実などを摘むのが女の仕事だった時代の名残で、必要なものを気の向くまま手に入れて巣に持ち帰ることを快楽と感じるよう、本能の奥深くに刻み込まれているんだとか。たしか、男がギャンブル依存症になるのと同じくらいヤバいんだっけ？

でも、実は私、金額的にはそんなにびっくりするほど浪費してない。買い物という行為が楽しいんであって、高いモノやいいものを買うのが楽しい訳じゃないから。

そう思うと、ほんとに男だった頃と真逆。だって、男にとっての楽しい買い物のイメージって「より多くのお金をかけて、より良いモノを手に入れる」ことに集約するもんね。例えば、車やバイクを新車で買うとか、完全防音のオーディオルームやホームシアターを作るとか、プレミアついてるアイテムの蒐集とか。出費がケタ違いだもん。

構造不況の世の中において、男たちは好きなものを好きなように買うこともできず、挙げ句の果てには生き様すら見失う。かたや女たちはスーパーやホームセンターですら生の喜びを満喫し、手の届く範囲で充分な幸せを感じながら明日への活力を養っているわけだ。コストパフォーマンス抜群だよね。女が強い時代になった、なんて言われて久しいけれど、少なくとも現代社会においては、もはや女は女であるだけで勝ち組を宿命づけられたと言っても過言ではないのかも――。

ごめんなさい、やっぱ過言かも。買い物が楽しすぎてちょっと調子に乗りました。

「えっと、ローテーブルとか大きいものは後日宅配して下さい。それ以外のものは自分で持って帰ります。はい、カーテンとか小物類とか。袋に詰めて下さい」

サービスカウンターでお願いして、両手両肩に大量の買い物袋をぶらさげる。端から見たら八千メートル峰に挑むフル装備の登山家みたいなことになってるんだろうけど、全然平気。強がりじゃないもん。全部必要だから買ったんだもん。重くないもん。

帰宅してすぐ、買ってきたものを洋間に配置していく。
はっきり言って機能面では何も変わってない。間取りはもちろん、ベッドや大型家電みたいな暮らしに直結するアイテムは全部そのままなんだから。ぱっと見、カーテン、カーペット、クッションのカバーが赤やピンクの暖色系に、ベッドカバーがパッチワーク風のにぎやかな柄になっただけ。ほんとに、それだけ。
なのに。
何これ、もう、ちょっと、何なのこれ。
「……いい感じ。すっごい落ち着く……」
部屋の雰囲気が激変してしまった。あの落ち着かない部屋と同じ場所とは思えない。言葉で表現するなら、カクカクでカチカチでゴツゴツしてたのが、ふわふわでもふもふでほわほわになったというか。うん、これは自分でも上手いこと言った気がする。
笑顔でベッドに腰掛けて、そこからフェイクファーのカーペットへダイブ。クッションを抱きかかえてごろごろごろごろ。あはは、あはははは、うふ、うふふふふ。楽しい。すっごい楽しい。いやもうほんとどうしよう楽し過ぎる。紗英さんが目覚めて地下での暮らしに戻っても、この部屋は私の部屋としてキープしていたいくらい。来月になったら頼んでみようかな。
「部屋の相は、住んでる人の心のかたち……か」
ぺたん、と、鳶座りして。
明るい色合いになった部屋を、ぐるっと、見回す。
「私と一緒に、この部屋も、女の子に生まれ変わったんだ……」
そう思うと、何だか感慨深い。
「でも正直、まだベースが出来たくらいかなぁ……。あっちの空きスペースとかに可愛らしい置物とか、観葉植物とか、スタンドライトとか……ううん、そっちの壁から向こうに大きな布を掛け渡して、ひとまず本棚とか隠すだけでも……」
もっと凝ってみたい、という欲が早くも出始めた。
いっそ、部屋作りを趣味にして、飽きるまで極めてみようかな。
輸入モノの家具とかを買ったりしなければ、そんなにお金がかかる訳じゃない。それに、もともとは一ヶ月間ホテル暮らしをする予定だったんだから。紗英さんも以前「今のあなたが一番楽しいこと、嬉しいことを一つ一つ探して」と言ってたし、こういう浪費なら許してくれるだろう。
この部屋を――私の心の中を、より女らしく、今の自分に似合った色へ変えていく。そのためにはどうすればいいか。考えているだけでも楽しくて楽しくて仕方がない。
「ま、それはもう、明日にしよっと……」
そこそこ汗もかいたし、お風呂に入ってさっぱりしたい。
ポニテに結っていた髪を、久しぶりに解いて――。
「……あ」
素っ裸になる前に気付いて良かった。
「私、今、着替え一つも持ってないよ……。買って来なきゃ！」
脱ぎかけた服を着直して、再び部屋を飛び出す。あはは、またお買い物だね。おっかいもの、おっかいもの――我ながらちょっと危ない人かも。でもいいんです楽しいから。

いつの間にか陽は落ち、周囲も薄暗くなっていたけれど、まだショップが閉まるような時間じゃない。目指すは隣町にあるショッピングモール。あはは、また脳内麻薬ドバドバの楽しいショッピングタイムだ。想像するだけでテンションが上がる上がる。羽根が生えたように軽い足でマンションの階段を駆け下り、踊り場でときどき意味もなくクルクル回って踊ったりしながら一階に到着。ホールのオートロックは中から外へ出る時は機能しないので、普通の自動ドアと同じ感覚で通り過ぎ、外の通りへ足を踏み出した。

——その時。

ふと耳に入ってきた。がさがさ、ごそごそ。がさがさ、ごそごそ。変な音。

周囲を見回すと、マンションの裏手の方で懐中電灯みたいな明かりがゆらゆら揺れていた。変な音は間違いなくそこから聞こえてくる。

ひょっとして、ゴミの集積場を誰かが漁ってる？

真っ先に思いついたのは、ちょっと前に私が出した粗大ゴミ。まだ使えそうだから貰っちゃおうかな、みたいな感じならいいんだけど、単なるイタズラ目的だとしたら？　たしか家具類って、バラバラに破壊されてたりすると業者が回収してくれないんじゃなかったっけ。ゴミの点数が増えたと見なされて追加料金を取られたりしたような？

何にせよ、確認しないと始まらない。恐る恐る近寄っていく。

懐中電灯を持っている人の背中が見えてきた。女の人だ。白いブラウスに七分丈のスキニージーンズ、足下はパンプス。肩にはトートバッグ。いかにも仕事帰りのＯＬって感じ。とても業者には見えない。ゴミを漁るようなタイプの人にも見えない、

でも、確かにゴミを漁ってる。

「あの……」

何してるんですか。そう問いかけようとした私の声が、途中で凍り付く。

その女の人が漁っていたゴミは、確かに昼間、私が出したもの。でも粗大ゴミじゃない、片っ端からビニール紐で縛って捨てた男物の衣類。

女の人はそのうちの一つを握りしめて、じっと見つめていて。

やおら、その服に、顔を埋める。

その肩が、小さく震える。押し殺しきれない嗚咽が漏れてくる。

意味がわからない。

だってその服は、私にとってただのゴミ。だから捨てたんだもん。それを漁るだけならまだしも、握りしめ、顔を埋めて泣いてるなんて。この女何なの？

「……っ」

女の人が私の気配に気付いて、弾かれたように振り向く。赤いフレームの眼鏡の向こうにある潤んだ目が、驚きのあまり丸く見開かれる。

最初はただ、背後に誰かがいると気付いただけ。純粋にびっくりしたって感じ。でも、私の顔を凝視して、ほんの僅かの間に何かを考えて——はっとなって。

こちらを睨み付けるような、気圧されるほど真剣な顔に、変わる。

「あ、っ……あなた、まーやさんでしょ……？　そうよね?!」

眼鏡の横合いから差し入れた指で涙を拭いながら、ほとんど叫ぶような大声で私の名前を呼ぶ。猛然と立ち上がって私の方に歩み寄ってくる。さっきから驚きっぱなしだった私はただ呆然と立ち尽くしていて。逃げるどころか後ずさる暇もなかった。

二の腕を、物凄い力で捕まれる。
抵抗しようと思ったけれど、ちょっとくらい身を捩ってもびくともしない。この女の人、私より頭半分くらい背が高いんだけど、それだけ力も強いんだろうか。い、っ――痛い、痛い、痛い。何なのこの女、どこの誰――。
「管理人から聞いたの、彼の妹って本当なの?! あなたのお兄さんって今どこにいるの?! あなたなら知ってるわよね?! お願い教えて、答えて!!」
ほとんど一息で、まくし立ててくる。
それで、ようやく。
「……あ」
女になって以後、遠ざけて消えかけていた記憶が蘇る。
二人で逢う時、この女は眼鏡なんてかけてきたことなかった。こんな普段着姿じゃなかった。だから気付かなかった。ちゃんとお洒落して、化粧して、髪も整えて、綺麗にして――昔の私は、そういう姿しか見たことなかった。だから気付かなかったんだ。

彼女の名前は、コトコ。
私が男だった頃に、最も親しかった女。
そして、女になった私が、思い出ごと捨て去ろうとしていた女。

体験版の内容は以上で終了です。
続きは作品本編でお楽しみ下さい。